テーマ
感動できる利用者サービスの工夫

図書館

01 利用者層やテーマに沿った図書館サービス
由利本荘市中央図書館

02 東日本大震災と宮城県図書館の取組み
宮城県図書館

03 「読書シティ宣言」のまち、村山市。
交流と学習の拠点として、独自のイベントや仕組みを考案
村山市立図書館

PASSION

VOL.34 November.2012
パッション 第34号 発行元：金剛株式会社 平成24年11月発行

04 従来の枠を超え、
人々を魅了する「場」へのチャレンジ
武蔵野プレイス

05 市民アンケートや市民満足度調査から
図書館サービスの強化を図る
安曇野市中央図書館

06 1からの図書館づくり
綾川町立生涯学習センター

07 図書館づくりを通じて醸成された
価値観やキャンパス整備
明治大学和泉図書館

08 学生支援を目的とした融合的なサービス
獨協大学図書館

09 利用者を熟知した「こころ」を打つサービス
国際日本文化研究センター

10 人がつながる、アイデアが生まれる
会員制ライブラリー「BIZCOLI」
九州経済調査協会・BIZCOLI

11 新宿分館の筑波移転と自然史標本棟の建設
国立科学博物館

12 小さな博物館の☆になれ
飛鳥資料館

13 発掘成果や体験交流等を通した
縄文文化の発信
是川縄文館

14 体験型展示など楽しみながら学ぶ仕掛けで
地元ゆかりの文学を紹介
高志の国文学館

15 「土間と蔵」が作り出す空間に、
自然光が活かされたミュージアム
株式会社シーラカンス アンド アソシエイツ

16 全館一丸でのIPMへの取組み
熊本市現代美術館

文化施設

空間をデザインする
KONGO
www.kongo-corp.co.jp

発行：金剛株式会社　企画編集：金剛株式会社企画チーム　問い合せ先：kongo@kongo-corp.co.jp

図書館

01 利用者層やテーマに沿った図書館サービス

Interview

由利本荘市中央図書館

話し手　**古川　淳**（由利本荘市中央図書館 主査）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[木本]由利本荘市中央図書館の概要と建設経緯についてお話を伺います。

[古川]羽後本荘駅前に新しい図書館がオープンしました。収蔵可能冊数は22万冊、座席数188席で、株式会社新居千秋都市建築設計による建築デザインも斬新な図書館です。

駅前にあった病院移転後の跡地整備で、市は国土交通省の「まちづくり交付金」を活用し、市内で老朽化・分散していた文化施設をワンストップに集約し、また地域から要望があった衰退しつつある都市機能の活性化も推進するため、人々の賑わいを創出する拠点として、総合的な文化施設が建設されることになりました。具体的には図書館、文化ホール、交流活動施設、教育学習施設、店舗施設（物産館、飲食店）、プラネタリウムのゾーンからなる複合施設です。

[木本]図書館づくりで考えたこと（配慮したこと、新しく採用したこと）は何だったのでしょうか？

[古川]由利本荘市は1市7町が合併し誕生しています。新図書館が中央図書館としてスタートするに当たり、図書館が地域にどのような形で貢献できるか、役割や機能はどうあるべきかの検討を進めました。

「由利本荘市の先覚者」紹介コーナー

まずは、各地域にある図書館や公民館図書室への支援です。市町村合併に伴いそれまで各地区毎にまちまちであった業務の整理に着手し、業務の標準化に努めました。各館の成果比較ではなく、全市の図書館活動がいかにしてより良い効果を発揮していくかを念頭に職員間の連携強化を図りました。

次に図書資料の構成に当たっては、従来の基本的な図書館サービスに加え、ある特定の利用者層やテーマへのサービスを強く意識しました。具体的なキーワードとして①U-20、②生活支援、③ビジネス支援、④外国語、⑤行政連携を掲げ、コーナー作りや選書の基本としました（表1）。市民や利用者が図書館に対して、より目的をもって利用してもらいたいとの意思表示を強く発信することで、自らのサービスの質を高めながら、利用者への浸透を図っていきたいと思っています。

続いて、この図書館を地域資源の情報発信拠点として捉えました。単に一般図書資料だけではなく、地域に密着した外部機関や人材との連携により、より多角的な郷土資料を収集、整理し、情報発信に努めていきたいと考えました。

企画展示の様子

（表1）ターゲットとテーマを特定したコーナー作り

❶U-20	中高生を中心とした10代の趣味趣向に合わせ、入門書的な内容を多く揃える。
❷生活支援	趣味趣向をはじめ、日常の問題や課題の解決につながるような資料を多く揃える。
❸ビジネス支援	ビジネス全般の入門書から、業種別のものまで。 近隣の秋田県立大学・市商工振興課・市産学共同研究センター・市商工と連携。
❹多言語	英語・中国語・韓国語の図書を揃える。
❺行政連携	行政と連携した企画展示を行う。

館内の様子

こどもフロア

さらに、学校との連携強化に取り組んでいます。資料提供・レファレンス対応や授業で使用する参考資料の提供はもちろんのこと、学校図書館の整備支援のために中央図書館所属の臨時職員を雇用し、学校図書館へ派遣して日常業務のサポートを行っています。

[木本]図書館づくりに大変だったことは何でしたか。

[古川]設計者とのやり取りが大変でした。図書館サイドでも色々と要望しましたが全てが採用されたわけでもなく、現況の出来上がったものに対して、ゾーニングやコーナー割りと配架を行うことになりました。

[木本]今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。

[古川]館内動線の中央部に、ヤングアダルトを対象にした「U-20」と名づけたコーナーを設けところ、面白い効果が出ています。当初は中高生を中心とした10代の利用者を想定したのですが、開館後、色々な世代の方々が利用されているのです。例えば、「ネイリストになるには」などの本は将来を夢見て少し背伸びをした小学生が利用しています。各種入門書については、一般書のコーナーに置かれている資料よりも、もっと噛み砕いた内容のものが多いので、20代より上の年代の方々にも多くご利用いただいております。このコーナーによって、年齢に関係なく多くの利用者の方々が本に触れ、本を通じて世代間のつながりが生まれるきっかけとなったことを、職員みんなでうれしく思っております。

U-20コーナー

[木本]最後に、今後の活動について展望を伺います。

[古川]現在の課題である資料支援や人的支援のレベル向上を図りながら、中央館として外部に対する拡がりを強めて行きたいと思います。各地区の図書館や図書室を積極的にサポートし、U-20での成功事例を共有しながら、ビジネス支援や他のサービスも外部機関との連携でより質の高いサービスを提供し、新しいサービスの展開を探っていきたいと思います。図書館の取り組みが地域活性化のきっかけやヒントになればと期待しています。

[木本]本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

閉架書庫は一部ガラス壁になっており、中の様子をみる事ができます。

由利本荘市中央図書館

所在地／秋田県由利本荘市東町15
開館時間／9:00~20:00（土・日・祝日は9:00~18:00）
休館日／ホームページにてご確認ください
URL／http://www.city.yurihonjo.akita.jp/honjo/tosyo/index.htm

設計監理／株式会社 新居千秋都市建築設計

図書館

02 Report 東日本大震災と宮城県図書館の取組み

宮城県図書館

熊谷 慎一郎（宮城県図書館）

改めて言うまでもなく、日本は地震大国です。

日本のどの地域でも、大なり小なり地震災害に見舞われています。その意味で地震災害は他人事ではありません。宮城県を襲った地震の主なものをあげてみると、戦後だけで、宮城県北部地震（1962年4月30日）、1978年宮城県沖地震（1978年6月12日）、三陸南地震（2003年5月26日）、宮城県北部連続地震（2003年7月26日）、8・16宮城地震（2005年8月16日）、岩手・宮城内陸地震（2008年6月14日）などがあります。東日本大震災発生から1年半あまりが経過した現在も復興へ向けた取組みが各所で行われています。

東日本大震災による宮城県内の市町村図書館の被害の概要は、以下の2点にまとめられます。

- 地震による被害により、震災以前の図書館サービス再開が困難になった図書館が多い。
- 津波による被災地域では、図書館が高台にあり浸水を免れたところがある一方、浸水域にあった館は被害甚大である。

宮城県内の市町村図書館は、すべての館が震災後に一定期間の休館を余儀なくされました。資料の落下や施設の破損などはどの館にも共通しています。宮城県図書館も例外ではなく、施設の被害や資料の落下があり、再開したのは5月13日のことでした。多くの資料を棚に戻しながら、一方で、自館のことだけではなく、県内の市町村図書館の復旧・復興を支援する取組みを行っています。

図書館をめぐる支援の取組みには、震災直後から資料レスキューや代替施設の提供や図書館の再建のための運営企画支援といった被災した図書館への支援のほかにも、移動図書館車両の提供や仮設住宅団地などへ配本するための資料提供といった被災地の図書館が活動する際の支援が見られました。

名取市図書館どんぐりこども図書室開館に向けた準備作業（2012年1月）

山元町中央公民館図書室リニューアル作業（2012年6月）

宮城県図書館は県立の図書館です。宮城県内の市町村図書館のための図書館という一面を持ちます。宮城県図書館が意識したのはこの点でした。宮城県図書館のサービスは市町村図書館を通じ、間接的に住民の皆様に提供されます。市町村の図書館が復旧・復興を果たし、住民サービスが提供されることが重要と考え、例えば、津波によって図書館が全壊してしまった南三陸町や女川町の再建にあたっては何よりも図書館の企画運営を支援することにしたのです。震災から1年半以上経過した今でもこの方針は変わっていません。

南三陸町図書館再開館（2011年10月5日）

特別展「復興の道標―東日本大震災文庫展III」から県内図書館への支援の紹介

直接的に市町村図書館を支援する以外にも、宮城県図書館は、県内の市町村図書館等に対して情報を集約して提供したり、連絡会議を主宰したり、あるいは、研修会を開催したりといったことも行っています。震災直後から県内の被災状況を集約してWebを通して発信しました。市町村図書館向けには、各館が相互貸借資料などに関する物流の復旧具合を提供できる簡易データベースを作成しました。研修会では、地震の揺れに伴う資料の落下によって破損した資料は相当量に上っていると見込まれたので、国立国会図書館資料保存課から職員を講師として招き、資料の補修を取り上げました。これらは特定の市町村図書館に対しての直接的な支援というよりも、間接的な県内の市町村の図書館全体への支援といえます。

市町村図書館への支援以外にも宮城県図書館が取り組んでいることがあります。それは、震災の記録を収集し、整理して提供することです。宮城県図書館に、震災に関連する資料を集中的に集めた「東日本大震災文庫」を設置しました。震災に関する資料は多く発行されています。書店で買えるものもあれば、買えないものもあります。書店で買えないものは発行者へ連絡して取りに行くこともあります。今を生きている私たちだけではなく、百年後を生きている人々にもこれらの資料を届けなくてはなりません。

集めた資料はこれまでに3回ほど開催した特別展にも活用されています。初回は2012年2月から5月まで「絆の証」と題し、店舗再開のお知らせや各地で発行されたかわら版などの資料から震災時の被災地の状況や復旧の過程を辿りました。2回目は多くの漫画家から被災者を励ましそうと寄せられたメッセージを展示、3回目は「復興の道標」と題して復興に向けた様々な産業や地域の取組みを紹介しています。あわせて、重点的に取り組んできた市町村図書館等への支援の様子についても紹介しました。

特別展「絆の証―東日本大震災文庫展I」の様子

被災した図書館は復興へ向けて着実に歩みを進めています。これからは、被災した図書館の復興はもちろん、図書館が自治体のなかで、どのように位置づけられるのかに注目しています。図書館は人が集う場所であり、コミュニティの核になることができます。一方、図書館の持っているアーカイブ機能は、共同体の記憶装置として働きます。人々が集い、経験を共有する場として、そして記録された多くの資料が地域に保存されていきます。今回の震災で失われた地域資料はなんとしても再整備を果たしたいところです。最終的には、住民が震災に立ち向かい、人と人とがつながりをもち、多くの団体とも有機的な結びつきを得てコミュニティを形成していくものだと思います。図書館には、復興期に発揮できる重要な機能を備えています。県立図書館は市町村図書館の活動を積極的に支えていく必要があるのです。

宮城県図書館

所在地／宮城県仙台市泉区紫山1-1-1
開館時間／9:00~19:00
休館日／ホームページにてご確認ください。
URL／http://www.library.pref.miyagi.jp

図書館

03 Interview

「読書シティ宣言」のまち、村山市。交流と学習の拠点として、独自のイベントや仕組みを考案

村山市立図書館

話し手　**奥山 典子**（村山市立図書館 業務主査）

聞き手／木本 邦郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[木本]村山市立図書館の概要と建設経緯についてお話を伺います。

[奥山]JR村山駅近くに、複合施設「甑葉プラザ」の中核として図書館がオープンしました。収蔵可能冊数は15万冊で、現在は9万冊の所蔵です。村山市には、大正9年から続く図書館があり、地元で親しまれてきましたが、老朽化のため新しい図書館が要望されていました。平成14年度には、市民や有識者による図書館構想検討委員会が発足、具体的な検討がキックオフとなりました。平成17年には、行政内部にも複合施設プロジェクトチームが置かれ、平成19年に公開プロポーザルで設計者が決定しました。基本設計が提示されてから、市民や小中学生との話しあいが何度も重ねられ、その都度設計者が出席し意見交換を重ねた結果、重要な設計変更やワンフロア化が実現していきます。また、構想段階から話し合いの場には、必ず図書館職員も参加させていただき、行政内部や外部の方々から図書館への理解が深められたことは、とてもありがたいことでした。

更には、複合施設コンセプト「交流と学習によるにぎわいの創造」が掲げられ、市長のリーダーシップと市民、行政との協働により平成22年5月に開館しました。

[木本]図書館づくりに考えたことはなにかありますか。

[奥山]構想の初期段階から、図書資料全てにICタグを貼付管理する方針を打ち出しました。従来、貴重な郷土資料は紛失を怖れ、閲架で保管管理していました。ICを導入すれば、貴重な資料も全て、利用者が直接手に取ることが出来るようになります。またセルフ貸出機導入でプライバシーが守られ、BDSで無断持ち出し防止もできるなど、多くの派生効果があると思ったからです。

また、これまで図書館を利用したことがなかった方々へのPRと、より親しまれる図書館づくりのため、従来にない様々なイベントや仕組みを考えました。

[木本]イベントや仕組みとは、具体的にはどんなものですか？

[奥山]代表的なものをご紹介すると、1つ目が「図書館からの贈り物事業」です。

村山市では国民読書年に図書館がオープンしたことを記念して、小学校入学と中学校入学時の2回、希望する本を贈呈する事業を始めました。小学生は「はじめの1冊」、中学生には「飛躍の1冊」と名付け、希望する本をプレゼントしています。他の図書館ではブックスタート事業が行われていますが、村山市では、自らの力で読める対象者に、自ら選んだ本を贈ることに重要性を感じています。

更にこの贈りもの事業には、赤ちゃんを授かったお母さんがおなかのわが子に、「世界で1冊しかない絵本」を手作りする、「プレママの絵本づくり教室」もあり、誕生、入学という節目を飾っています。

2つ目は、「甑葉プラザ応援団」の立ち上げです。図書館のすぐ近くに商店街があり、主旨に賛同してくださる店舗と図書館、甑葉プラザのまちづくり推進室とが連携し、図書館利用者カードを提示するとお得なサービスが受けられる仕組みを構築しました。図書館の登録者数を増やすことが第一の目的でしたが、利用者カードにステイタス性が生まれ価値が高まりました。加盟店は年々増え、商店街には新たなお客様が訪れ、活性化に一役買っています。

図書館からの贈り物事業

手作り絵本

3つ目は、「夜の図書館」です。春夏秋冬の各シーズンに1度、土曜日の21時30分まで開館を延長して行っています。閲覧席以外の館内照明を落とし、書架照明だけという大人のビターなシーンを演出しました。この時だけ館内はオープンカフェになり、飲み物をはじめ、職員手作りのお菓子もチャリティで提供しています。夜の図書館を待ちわびているファンが、たくさんいるんです。

4つ目に「貸し切り図書館」です。近くの小学校から、学年で自由に利用したいんだけど、何とか出来ないかとの相談があったことがきっかけで、貸し切りサービスをスタートしました。平日の閉館後の2時間程度、親子で自由に来館し、読書を楽しんでもらいます。学年ごとの貸し切りなので、お友達と逢える楽しみもあると大変好評で、春秋と継続的に実施しています。貸切は夜だけでなく、開館前の朝の貸切や、企業の社員教育や子ども会、友達のサークル貸切などにも利用を広げ、合わせて上手な図書館の活用法ガイダンスも行いたいと、市報にも積極的にアピールし利用を募っています。

[木本]今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。

[奥山]何といっても、贈り物事業で本を受け取る子どもたちの表情です。教育長から一人一人本を受け取る際、はちきれんばかりの笑顔と、心からのお礼の言葉が聞かれるんです。「ありがとう、一生の宝物にします！」そんな子供たちの一言一言には力があり、見ているこちらも感動でウルウルしてしまいます。また、プレママの絵本つくりでは、これから生まれてくる赤ちゃんへの思いが形となったママたちの笑顔には、内面から光り輝くようなキラキラした美しさを感じます。最近は、夫婦二人の絵本合作もあり、微笑ましく感じています。

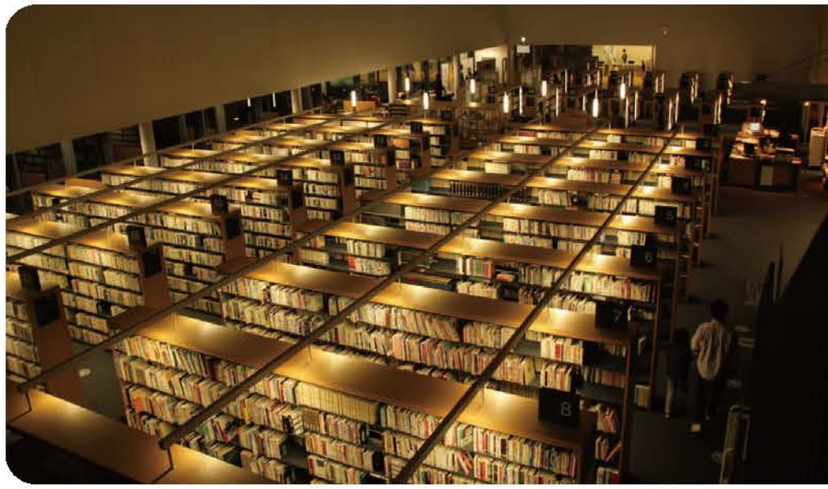
「人が楽しみ、何かを得る。」人が感性を磨き、ステップアップに繋がるきっかけを提供する場が図書館であり、本は世代をつなげる力を持っていると確信しています。また、様々なイベントは図書館職員や、開館前からバックアップしてくれたサポーターさんと協働で行っています。職員の前向きな姿勢、意欲、そして図書館サポーターとのいい関係のおかげだと思います。

[木本]最後に、今後の活動について展望を伺います。

[奥山]総務省が全国の自治体の先進的な取組を紹介する2011年度「市町村の活性化施策77事例」に、村山市の「読書シティ宣言」プロジェクトが選ばれました。村山市は全市をあげて読書に取り組もうとする「読書シティむらやま」宣言を打ち出し、イベント活動や仕組み作りを行っています。「全国読書川柳コンクール」創設も、その1つです。最近では家読（うちどく）のススメと言われていますが、結果的に街読（まちどく）へ発展できればと考えています。様々なイベントを通じて市民の皆さんに、本が身近にある生活って、ステキ！と感じてほしいですね。図書館はおもしろい、使い倒しちゃおう！と感じてもらえるように、今後も積極的にチャレンジしていきたいですね。

[木本]本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

館内の様子


夜の図書館

村山市立図書館

所在地／山形県村山市楯岡五日町14-20
TEL／0237-55-2833
開館時間／火～金曜10:00～19:00、土日祝日9:00～17:00
休館日／毎週月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始、特別整理期間
URL／http://www.shoyo-plaza.jp/library/
設計監理／高宮興介（計画・設計工房）＋日総建

図書館

04

Interview

従来の枠を超え、人々を魅了する「場」へのチャレンジ

武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス

話し手　公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団 武蔵野プレイス事業部
前田 洋一（部長（館長））
鎌田 浩康（課長（副館長））

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

［木本］本日は武蔵野市立「ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス」を訪問しました。多くの賑わいを創出されている秘密を探りたいと思います。はじめに、概要についてお話をお伺いします。

［前田］武蔵野プレイス（以下、プレイス）は平成23年7月にオープンし、1年後の来館者数は延べ140万人に上ります。視察見学の受入は100団体以上を数え、1日に3件の場合もあり、多くの方々に関心と利用を頂いています。

さてプレイスは図書館をはじめとして、生涯学習支援や市民活動支援、青少年活動支援を含めた4つの機能を併せ持った施設です。特長は、事業団が4つの機能を指定管理者で一体的に運営管理していることです。私たちは「複合"機能"施設」と呼んでいます。

これまで公共施設において複合施設ができても、単に機能の寄せ集めであって、各機能単体で管理運営がなされ、各機能が連携する際は一手間が掛かっていました。プレイスでは生涯学習の大きな括りで、指定管理者という事業体で運営しています。これまでの固定的役割に止まらず、利用者の多様なニーズに応じて様々なサービスが生み出される組織形態を追求した結果でした。一セクションを越えた一体的活動が可能となり、複合機能の施設特性を活かしながら付加価値（情報や場）を提供することで、本来の来館目的以外の発見や効果を期待しています。

プレイスとは場を意味しますが、多種多様な活動が出会い・交錯する「場」、子どもからご年配の方まで多世代にわたる交流を生み出す「場」という意味が込められています。言わば、本や活動を通して人とひとが出会い、それぞれが持つ情報を共有・交換しながら、知的な創造や交流が生み出されることで、地域社会（まち）が活性化するような公共施設を目指しているのです。

［木本］図書館づくりに、考えたことについてお伺いします。

［前田］プレイスの開館時間は9:30～22:00とし、開館日の全てに適用しています。何故かというと、これまで公共施設を利用できなかった人たちにも利用してほしいと強く感じていました。具体的にはビジネスパーソンが対象です。ライフスタイルの変化の中、公共施設利用への潜在的なニーズを拡げています。ただ時間の延長については職員の勤務形態等に影響しましたので、結構勇気がいることでしたね。

次に雑誌に力を入れ、600アイテムを揃えています。世田谷区立中央図書館は800アイテムを揃えられていますが、分館レベルでの数量はナンバーワンだと自負しています。昨今のIT情報が台頭するなか、自分にとって有利で有益な情報の獲得、選別する力も問われています。各情報媒体の獲得については、即時性と専門性という指標で評価を試みると、次のようになると考えます。

情報媒体	即時性	専門性
ネット	○	○
新　聞	○	○
一般書	×	○
雑　誌	△	△

このなかで雑誌はグラフィック的に、視覚的訴求力があり、娯楽性もあり、多くの人たちに手に取っていただけます。雑誌をきっかけにしたネットや一般書への探求への可能性もあるので、一つのツールとして活用してもらうためにも雑誌を重視しています。ただし、誤解のないように申し上げておくと、ここでは、即時性に着目した場合、敢えて一般書を×に評価しましたが、そのことのみで一般書の価値が損なわれるということでは決してありません。

1階新着・返却資料棚

続いて、これまでの図書館は静寂の極みの場でしたが、プレイスは従来の枠を超え館内は「吹き抜け」構造で、日本一の賑やかな図書館と呼んでいます。2Fにはお母さん達も子ども達と一緒に楽しめるよう、生活関連の一般書2.5万冊と児童書3万冊を配架することで親子で読書ができたりして、普段でいられる場・気軽に来られる場として創出できました。当初、一般書を読んでいる人から「うるさい！」とクレームが来るのではと覚悟していましたが、利用者は想像以上に寛容でした。

2階吹抜け

［鎌田］このざわつきが心地いいと思うこともあります。なおB1Fには静の空間を設け、過ごせるようにしていますので、静と動の組み合わせた多様な空間がこの施設にはありますね。また2Fの一般書の配架にはNDCでは行っておらず、本屋さんみたいにどんなカテゴリーの本があるのか見やすいよう、ジャンル別に配架をしています。

［木本］新しく採用したことはなんでしたか。

［前田］ICタグの採用で自動貸出機、予約棚、新着図書棚・今日返却棚を導入し、セルフ化を実現できました。特に今日の返却棚は利用者からも好評です。理由は普段、返却処理された図書は配架するためには時間が掛かりますが、逆手にとり専用の棚を設けることで、利用者からの検索にリアルタイムに所在が分かるようにしています。利用者の一部にはこの棚を楽しみにしている方もいて、1Fの賑わいを創出しています。

［木本］1Fのカフェにも本を持ち込めるのですよね。

［前田］本や雑誌を持ち込めますし、カフェではアルコールも飲めるようにしています。カフェの選定に当たってもプロポーザル方式で4つの条件を提示しました。①プレイスのミッションを活かしてほしい、②そのためのイベントなども企画してほしい、③サービスの高いクオリティを守ってほしい、④本の持ち込みやアルコールも飲めるようにして様々な利用者に応じた環境を提供できるようにしてほしいという要求でした。だって家で本を読むときは飲みながらやっているではありませんか。万一、本を破損した場合は、図書館のルールに従って補償していただければいいのです。プレイスではビジネスパーソンのクールダウンの場として活用されており、セレクトできる環境を提供できていると思います。現在、事故や破損等のトラブルはほとんどありませんよ。

［木本］設立に当り大変だったことはなんでしたか。

［前田］プレイスの構想の段階から、お手本になるような施設がなく、日々の模索を積み上げながら、ソフトを作り上げていった感じです。複数の機能の連携と融合は正直、難しいところもありましたが、全国的に先駆けた取り組みは実現できたかどうかはまだ検証されていませんが、少なくとも誤った方向ではなかったと思います。雑誌のボリューム感、本を持ち込めるカフェ、公共施設として、図書館として型破りな運営は、来館者の数に比例していると思います。

［木本］本誌のテーマは「感動できる利用者サービスの工夫」を掲げています。

［鎌田］ネット上で検索してみると個人の方がTwitterやFacebookで、プレイスについてのコメントや写真をたくさん投稿されています。利用者や来館者の感動がSNSの場で情報発信されており、むしろ私たちが心折れそうになったときは、こういった情報をよく見る様にしています（笑）。

2階こどもライブラリー

［木本］最後に、今後の活動に関する展望をお伺いします。

［前田］プレイス全体が、いかに付加価値のついた情報をさらに発信していくかがポイントです。組織的な連携を密にし機能や人を融合しながら、市民サービスの向上に繋げていきたいと思います。なお図書館としての課題としては、いかに電子情報や電子書籍と共存していくかです。これまでの紙媒体と今後増加するであろう電子媒体との住み分けの問題が顕在化していくのではないかと思います。

さらには、生活に密着した利用者や市民に役立つ課題解決型図書館としての強化です。これまで以上に図書館の敷居を低くし、様々な情報を集約して利用者に応じたサービスを提供することを目指したいと思います。対面でしっかりと、人でしかできないことをサービスへ注力できるよう、業務の見直しも行っていきます。

1階マガジンラック・カフェ

武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館
武蔵野プレイス

所 在 地／武蔵野市境南町2-3-18
T E L／0422-30-1905
開館時間／9:30～22:00
休 館 日／水曜日、第3金曜日（第3金曜日の属する週の水曜日は開館）、年末年始、図書特別整理日
U R L／http://www.musashino.or.jp/place.html
設　　計／kw+hgアーキテクツ

ゆったりとしたソファ

図書館

03 Interview

市民アンケートや市民満足度調査から図書館サービスの強化を図る

安曇野市中央図書館

話し手　**青柳 温男**（安曇野市中央図書館 館長）
小林 敬治（安曇野市教育委員会 文化課図書館係 係長）
奈良澤 一恵（安曇野市教育委員会 文化課図書館係 主査）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[木本]本日は安曇野市中央図書館を訪問しました。はじめに安曇野市中央図書館の概要についてお話をお伺いします。

[奈良澤]平成17年10月に5町村が合併して誕生した安曇野市における図書館は、5館のうち4館はいずれも手狭で資料整備が困難な状況でした。また館内に憩う場所もなく交流の場にはなりにくい、ITや視聴覚関係設備が整っていない、子ども・お年寄り・障害のある人などへのサービスが充分に行われていない、など多くの課題を抱えていました。平成20年の市総合計画の中で図書館整備の方針が打ち出され、「信頼され、地域の力となる図書館を目指して」をスローガンに、約20万冊の新中央館が平成21年に開館しました。

[木本]図書館づくりに、考えたこと・配慮したことはなんでしたか。

[奈良澤]中央館として建設されることになり、中核施設としての役割・機能など色々と考えることがありました。建設予定地が穂高地区になり正直、駅と駅の中間地点で、交通の便はあまりよいとは言えません。そのような中、サービスのあり方や充実した資料提供を考え「滞在型」を意識することになりました。

一番の特長はいす、ソファを数多く配置している点です。座り心地がよく、ゆったりとリラックスできます。施設的には高い天井と低い書架、見渡せる開放感があり、空間的な余裕はあります。照明も落とした演出をはじめ、館の奥にはガラス壁一面のブラウジングコーナーがあり、併設された公園も眺望できます。

[青柳]しかしながら、機能的には不便なところもあります。収納率はダウンし、管理面ではブラウジングコーナーが奥になるので目が届きにくい点です。実際に運営してみて、課題が顕在化してきました。ただ利用者の視点では公園での眺めがいいので、非常に評判はよいですよ。

[奈良澤]図書館づくりに当り、平成19年度に市民アンケートを実施しました。アンケートで1番多い要望は、平日夜間開館への期待でした。そこで当館の開館時間は9:00～22:00としています。土日は昼間利用を想定し9:00～18:00です。仕事帰りに立ち寄れるとのことで市民満足度調査でも高い評価を頂きました。なお中学生以下の学生に対しては18:00までとし、帰宅の声掛けを行っています。

続いて2番目として、配本等の体の不自由な方への配慮です。当館ではディサービス施設や児童館、病院等への団体貸し出しを行っています。市の中核病院には常時100冊配架しており、月に1度入れ替えを行います。また視聴覚資料を中央館単独で約6000枚に上り、周辺自治体に比べて充実させました。

こういったアンケートを重視し、図書館サービスへ反映していきました。

[木本]図書館づくりにおいて、力を入れたことはなんでしたか。

[奈良澤]図書館サポーター制度です。月に1度のボランティア団体によるお話し会、週に1度のお話サポーターによるお話し会があります。なおサポーターの方は個人を対象にしています。一般的に組織化されてきたボランティア団体にお願いすることになるのですが、当館では個人個人を組織化し、ボランティア活動が気軽にできるように工夫しています。

一般書コーナー

[木本]職員構成をお知らせください。

[青柳]館長と正職員・臨時職員で22名です。

[奈良澤]サポーターではお話しサポーターは約20名、図書の配架や修理・カバー貼り等の軽作業を中心とした図書館サポーターは約40名、朗読協力を頂く有償ボランティアは17名登録されています。

[木本]サポーターの方への教育はどのようにされていますか。

[奈良澤]定期的な研修会を実施して、スキルアップを図っています。研修はお話しサポーターは年3回、有償ボランティアは月1回、及び図書館サポーターは随時内部講師や外部講師によって研修を行っています。ベテランサポーターが講師役になったりして、楽しんでいます。個人ですから、本人のやる気次第で、どんどんでチャレンジできますよ。

[木本]契約期間はありますか？

[奈良澤]基本的には1年ですが、継続は可能です。

[青柳]サポーターが図書館と市民のパイプ役的な存在ですよ。構想段階であった、市民の共同参画がありました。私たち行政から下ろすのではなく、アンケートに基づいた図書館づくりが市民の共同参画型になったと思います。

[木本]大変だったことは何でしたか？

[奈良澤]開館当初、館内での利用者の携帯電話の使用や飲食等が目立ち、モラルが低い状況でした。田舎に素晴らしい図書館ができたので、市民の方が図書館の利用に初めて利用する方が多く、ルールが分からなかったことが挙げられます。マナーの浸透については、個々への声掛けを行っていく事で、違反は徐々になくなっていきました。反対に「子供の声がうるさい」とクレームを頂いた方には、子供の性分と館内のワンフロアでの許容範囲として説明することで、お互いの譲り合いの気持ちを大切にしていきました。

[木本]今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。

[奈良澤]開館時間・日数を長くしたことと、声を掛けやすい雰囲気づくりに努めています。接遇マニュアルの読み合いをはじめ職員研修を通じて、サービスの質の向上を図っています。この積み重ねが、企画展示等へのアイディア出し等に発揮できていると思います。

[木本]今後の発展についていかがでしょうか。

[奈良澤]まずは図書館システムのウェブ予約を実施したいと思います。現在、館内の体制やルール作りに苦労していますが、早期に実現したいと思います。

次に、人を引き付ける図書館を追求していきたいですね。魅力ある図書館は、職員がしっかりしています。職員がどのような考えを持ち、サービスを行っているのか、強いては人づくりとして成長できる場として実現できるようにチャレンジしていきます。

[青柳]安曇野市の観光や産業を大事にしている資源に対して、図書館が積極的に絡み、資源情報の収集と発信、関連した情報の整理も行っていきたいと思います。

また、図書館に来たことがない人に対して、足を運んでもらう工夫を行っていきたいと思います。「図書館に来てみたら、気づくことが沢山ありますよ」ってね。

[木本]本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

児童書コーナー

ブラウジングコーナー

安曇野市中央図書館

所 在 地／安曇野市穂高6765-2
穂高交流学習センター「みらい」内
開館時間／平日 9:00～20:00、土曜日曜 9:00～18:00
休 館 日／ホームページにてご確認ください
U R L／http://www.city.azumino.nagano.jp/tosho/index.html
設計監理／場々・岡江設計企業体

図書館 06 Interview

1からの図書館づくり

綾川町立生涯学習センター

話し手　川原　篤（綾川町教育委員会 生涯学習課 主査）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

［木本］綾川町立生涯学習センターの概要と建設経緯についてお話を伺います。

［川原］綾川町役場の隣に、図書室と展示室と研修室を組み合わせた生涯学習センターが開館しました。開架・閉架を合わせて8万冊程度の図書館です。

綾川町は平成18年に2町が合併し誕生しました。これまでの図書館は老朽化、狭隘化が著しいうえに司書資格者もいないという、近代化の図書館サービスにはほど遠い体制でした。

地域住民の皆さまからの図書館新設に対する要望の高まりをきっかけに、また綾川町は昭和48年より「教育の町」宣言を掲げていましたので、教育委員会と財政担当課にて図書館建設への協議がキックオフされました。平成21年設計に着手しましたが、教育委員会をはじめ役場内でも図書館運営に詳しい職員が誰一人いない状態で手探りの中、設計事務所との打ち合わせや近隣図書館に何度も通い、綾川町図書館のあるべき姿を具現化していきました。

［木本］図書館づくりに考えたこと（配慮したこと、新しく採用したこと）はなにかありますか。

［川原］まず、図書館は多くの方が訪れる場であり、一般に本が好きな人は自然と来てもらえます。私自身、実は図書館担当になる以前は図書館を利用したことがありませんでした。そこで図書館づくりのポイントとして、今までに利用したことがない人をいかにして図書館に来ていただき、図書館利用を日常化していただくかを大切にしたいと考えたことです。具体的には、施設と運営でポイントを絞りました。

施設面では、気軽に入れる雰囲気や空間作りです。設計者との打合せを重ねたことで、天井を高くとり圧迫感をなくし、曲線を入れることでの空間への遊び心の演出、ワンフロアを設計には配慮していただきました。

運営面では、指定管理者制度の導入です。残念ながらこれまで綾川町には図書館運営のノウハウがほとんどありませんでした。近隣の図書館職員の方々へのヒアリングや教育委員会内での議論等を重ねながら、綾川町の要求仕様書を作成しました。図書館づくりでは、この仕様書作りが一番の苦労した点になりました。

［木本］指定管理者についてもう少しお話をお聞きします。

［川原］綾川町では行政改革の意識の中、民間にできることは民間委託を検討するとの方針が打ち出されました。先ほどもお話ししたように教育委員会にはこれまでノウハウがほとんどなかったことに加えて、綾川町がこれから司書の専門職を雇用し、図書館サービスを一から作り上げる時間もありませんでした。今日、全国各地で行政サービスの向上を図るために、ノウハウを持っている指定管理者への委託が進展しています。綾川町もそのような全国の動向を視野に入れ、指定管理者制度を導入し、指定管理者と町とが連携して図書館サービスを展開していく方針を固めました。

綾川町アイデンティティの展示様子

児童書コーナー

一般書コーナー

指定管理者は開館以来、多様なアイディアを駆使し、図書館サービスを提供していただいています。特に町内の情報を発掘し、テーマに関連した情報発信を積極的に行っています。長い目で見たこの効果については、子どもたちに対して記憶され、綾川町のアイデンティティ形成に期待しています。

［木本］今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。

［川原］利用者サービスを含めた運営は指定管理者に委託していますが、私たち教育委員会の立場として、インフラ整備の重要性を改めて感じています。サービスを提供できる場づくり、例えば図書館の中に専用の学習室を設けることで、子供たちだけではなく、町内外の方々に綾川町に触れるきっかけになれば嬉しく思います。ここは町の学びのステーションです。町民の皆さんの学びを応援していきたいと思います。

［木本］最後に、今後の活動について展望を伺います。

［川原］綾川町は指定管理者制度を導入しましたが、町としても積極的に携わり、指定管理者と共々に図書館運営をしていきたいと思います。教育委員会も利用者の声を聞き、指定管理者と対話を重ね、信頼関係の礎を築いていければと思います。綾川町の情報収集と発信に期待して下さい。

おはなしコーナー

［木本］本日は貴重なお時間を頂きまして、ありがとうございました。

綾川町立生涯学習センター

所在地／香川県綾歌郡綾川町滝宮318
開館時間／9:00～18:00
休館日／毎週月曜日、図書館整理日（毎月第4木曜日）、特別資料整理日（3日以内）、年末年始（12月28日～1月5日）
URL／http://www.town.ayagawa.kagawa.jp/
設計監理／株式会社 教育施設研究所

館内フロア 3階

図書館

07 Interview

図書館づくりを通じて醸成された価値観やキャンパス整備

明治大学和泉図書館

話し手

菅　和禎（学校法人明治大学 購買部施設課）
折戸 晶子（学校法人明治大学 学術・社会連携部 図書館総務事務室）
田中 義之（株式会社松田平田設計 総合設計室第三建築設計部 部長）
山崎 敏幸（株式会社松田平田設計 総合設計室第三建築設計部 主管）

田中さん　菅さん　折戸さん　山崎さん

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[木本] 平成24年5月に明治大学和泉図書館様（以下、和泉図書館）が開館し、運用がスタートしました。今回、図書館づくりに携わった様々な方々をお招きし、ここ和泉図書館にて対談形式で図書館づくりについてお話をお伺いします。

はじめに和泉図書館づくりに考えたことについて、各お立場での話をスタートしてみたいと思います。

[菅] 明治大学では大学創立130周年の記念事業の一つとして、老朽化した和泉図書館の建設計画を着手しました。当初は図書館の単独計画でしたが、正門近くの立地環境や動線アプローチの重要性を認識する一方で、不均一なアスファルト舗装仕上げや既存校舎との位置関係、うっそうとした樹木による視認性の悪さや暗さに課題もあり、大学の玄関口としてキャンパス全体の計画と捉え、解決を図りました。この図書館をきっかけに、学生の皆さんの記憶に残り、誇れ、キャンパスの原風景となる施設が完成したと思っています。

[折戸] 今回、学内には建設委員会が組織され、図書館職員もその事務局として携わることができました。築50年が経過し老朽化した上、学生の教育支援機能が時代のニーズに合わなくなってきたことから、新図書館では、グループ学習機能やリテラシー教育をより充実させた滞在型図書館を目指し、コンセプトを立案しました。

[山崎] 整備計画はプロポーザル方式で選定後、打合せを重ねていく中、当初の条件と大幅に変更することになりました。当初の条件では旧図書館の一部を残し新図書館を建てる計画で、図書館の位置が限定されていましたが、キャンパス全体の最終形を視野に入れた「一括整備」手法が大学側より提示されたことから、正門からのアプローチや既存校舎との適正な隣棟間隔、キャンパス全体のランドスケープを考慮した図書館の配置計画が可能となりました。

[田中] 段階整備を一括で建替えるという計画条件の変更は、大学側にとって大きな決断だったと思います。その結果、既存図書館の代替施設として、工事期間中はプレハブでの図書館の運用が必要となりました。

[折戸] 代替施設での図書館サービスについては、学生への不便が無いように、図書館内部で協議を重ね、無事運用を行うことができました。

[菅] 私たち施設課はよりよい施設を整備すると同時に、コストマネジメントを行います。移転・解体・建設といったトータルでコストを管理しなくてはなりません。但し、代替施設であっても学生への図書館サービスのレベルを落としたくはなかった。

[折戸] 図書館でもお金を掛けずにサービスを提供することをテーマに協議しました。例えば、段ボール箱を活用した書架を思いつき、3段積みに配架しました。色々と工夫した結果、新しいアイディアが次々と生れてきました（笑）。

[山崎] 段ボール箱の書棚について、何段積めるか設計打合せで議題となりました（笑）。

[木本] 図書館サービスの運営面はどうでしたか？

[折戸] 基本コンセプトとして、「人と人・人と情報を結ぶ"架け橋（リエゾン）"」を掲げました。和泉キャンパスの特性としては1・2年生が多く、教養課程を学びますので、入学後間もない学生にとって、図書館の敷居が高くなってしまってはいけません。気軽に入れて、みんなで利用してほしいと思っています。こういった中で、図書館サービスとして、初年次教育の必要性を強く感じていましたし、そこに力を入れています。

[木本] 初年次教育とはどんなものでしょうか。

[折戸] 大学入学直後の学生に対して行う導入教育ですが、例えば、レポート作成の方法や文献の探し方・集め方を身に付けるための教育などですね。これは、どんな授業でも必要となるもので、授業の一環として図書館職員が教えています。また、学生同士が討論したり、資料作成を行えるグループ学習の場も充実させ、導入教育の支援をしています。グローバルなコミュニケーションが要求される中、討議できる場が図書館にあります。一方で、従来からの静寂性を保つ場所も必要です。静寂と賑わい、この2つの要素を取り入れながら、どう区切っていくかがポイントだったと感じています。

[田中] それぞれが評価する空間とは何か、具体的なイメージの共有化が重要でした。そのために、図書館担当者と施設課担当者、設計者の3者で多くの図書館を見学し、ゾーニング、空間をはじめ家具や照明等のインテリア、外装・内装の素材に至るまで細部にわたって、関係者で議論を重ねたことで、この図書館の方向性を見出すことができました。

[菅] 確かに、コンセプトを掲げながらそれを完成させるまでのプロセスでは40以上の大学・公共施設の見学が非常に参考になりました。その中で本学に合った図書館像を創りあげていきました。また、施設だけではなく、キャンパスの雰囲気についても見学する視点を置いたことも良かったと思います（笑）。

[折戸] 今まで図書館のゾーニングや家具だけを見ていましたが、外壁についても関心を持ったことは面白かったですね。施設外観の重要性も認識が高まりました。特に印象に残ったことは、キャンパスの中での図書館の位置です。学生たちが日常的に通る動線に配置しなければならないと強く感じました。

[菅] 見学やヒアリングにより得た情報をレポートにまとめ、その図書館の「良い部分」「悪い部分」について分析し、みんなでその認識を共有化することが出来ました。結果的にはその分析と認識の共有化がその後の設計作業を進める上で非常に役立ちました。

[山崎] 一般的に入ってみたくなるとか、心地良いとか、言葉だけでは捉えにくい所もあります。見学や協議を通じた共通認識のお蔭で、建屋をガラス張りにする～「見える」～「興味の喚起」といったハードウエアについての具体的な提案が行い易くなりました。

また図書館とは単に本を借りにくるだけではない「滞在型」だったり、グループの様々な活動ができる「ラーニング・コモンズ」といったものの具現化に着手していきました。特に大学側からの要望で、「音のゾーニングの設定」が懸案でした。遮音性のあるサッシやガラスの反響等の建築資材の選定に細部にまで考慮

共同閲覧室とコミュニケーションラウンジ 2階

しました。フロア毎に、又奥に向かう毎にだんだんとグラデーションしながら「静けさが段階的に変化する空間ゾーニング」を実現しました。

[曹]機能を重視する図書館職員とデザインを加味する設計事務所のバランスを取りながら、調整していくのは苦労しましたね(笑)。最近の良い図書館といわれるところは「アクティブ・ラーニング」をキーワードとして様々な試行錯誤が行われています。本施設の計画においてもその部分の議論が重要でした。

[田中]関係者の中で共有化していった空間ゾーニングは、下層階では、交流空間を中心にカジュアルさを感じさせ、上層階へ行くと落ち着きと個人の集中度のアップにつなげるような計画でした。設計側では、1・2Fはガラス張りの透明感、3Fはルーバーを設け、4Fは外部の緑の環境に親しみながら集中度を深めるオンとオフの変化を意識しました。

[曹]その中で、課題となってきたのが、床面積に対し、膨大な蔵書数でした。そこで見学先の事例からヒントを得て、集

密書架を積層に出来ないかという要望を設計者に依頼し、検討がはじまりました。その積層集密書架の占める面積が大きかったため、どこにプランニングしたらよいか、設計者にも色々と検討してもらいました(笑)。

[山崎]積層集密書庫の空間性やデザイン性を考えると、当初はポジティブな空間構成要素とは考えていませんでしたが、これだけの量の本が置かれるスペースは他にないため、前面を吹抜にすることでその圧倒的な本の力を最も端的に表現できる場所になるのではないかと考えました。

[田中]吹き抜けに面した6層分の積層集密書庫のショーケース化は、綺麗な表装の大型本、圧倒的な本のボリュームにより、学生へ知識への興味と欲求を高める「本の持つ力」を引き出しています。また、使われ方によって交流活動の場としても繋がっていきます。その例として先日、写真部がギャラリーとして活用していました。

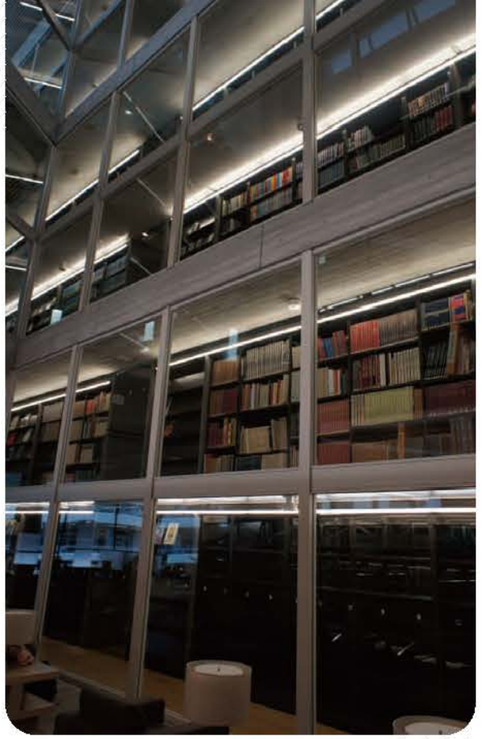
[折戸]この積層集密書庫は開架の扱いで、配架されているエリアには学生が自ら入っていけるのです。直接、本を手に取り、ブラウジングをしながら、判断することを重視しています。ですので近年、導入が増えている自動書庫計画は一切考えませんでした。やはり利用者への使い勝手を優先させたことが良かったと思います。

[曹]集密書庫は一般的には閉架書庫ですが、図書館の方針や、見学に行ってみんなで議論したことから生まれた、新図書館への思いを踏まえ、開架書架としての積層集密書庫を実現できたと思います。

[木本]その他、ゾーンごとの空間性や音への配慮についてお聞かせください。

[田中]これまでの6人掛けの閲覧テーブルは、2・3人が利用する度に1つの椅子が荷物置場になり効率が悪くなっていました。今回、プライバシーを考慮した、使いたくなるキャレルができないかと様々な工夫をしました。

[山崎]利用者の視点を重視し、書架や家具や閲覧席など細かい配慮を行いました。閲覧席の衝立の高さや透明度までも、利用者の気分や雰囲気で場所を選べ、個人の占有度が選択できるようにしました。また書架配置を斜めにしたことが大きな特徴です。結果的に、利用者に本が近く、本が見えやすい計画となりました。



6層分の積層集密書庫

[曹]敷地形状から生まれたひし形プランでしたが、そのグリッドの考え方を書架配置に至るまで貫いた設計者の斜めへのこだわりは強かったですね。

[山崎]平面形から生まれた斜めグリッドを構造計画やディティールにまで展開しました。書架や家具の形状、サッシュの方建や石割までも斜めグリッドとして、計画全体を整合させていきました。その中で運用面において、本当にこれで問題がないのか協議を重ねました。

[折戸]確かに、最初はひし形の建築プランの中で構造や書架配置は直行グリッドでしたね(笑)。書架を斜めに配置することは、国内で調べてみましたが、あまり事例がなく珍しいことでした。そこで事例となる図書館に、書架配置の使い勝手について、利用者の声、管理者の声を確認しました。

[山崎]確かに、通路から見た時に、本が目立ちますね。

[折戸]他大学の見学者からも、「本が見える」という評判をいただき、あらためて本の力を実感した次第です。

[木本]さて、次のテーマとしては図書館づくりでの苦労点についてお話をお伺いします。課題や3者のコンフリクトについてはどのようなものがありましたか?

[田中]やはり一番の苦労点としては、冒頭でも話した整備手法の変更という大学側の大きな判断がポイントだと思います。

[曹]そのことは、我々施設課及び図書館の担当者が学内を調整するのに大変でした。

[折戸]お陰様で蔵書計画や各エリアの配置が要望通り叶って本当に助かりました。この他、図書館にとって照明や音の対策は、閲覧や学習環境において非常に重要な課題でした。

[山崎]設計期間が十分に取れたので、相違も協議できました。高速道路が隣接するという立地でしたが、遮音対策についても色々と検証することができました。

[田中]音については外から、中から、学生の声やフローリングの音など色々な反響を検討しましたね。また光についても斜光や柔らかい光なども考慮し、実際にモックアップで反響音や照度などを再現することができました。

[曹]閲覧空間の照度や光環境についても議論を重ねました。和泉図書館の書架、閲覧空間には天井に照明がありません。見学先の図書館をヒントにし、間接光をとりいれながら光源を直接見せない計画にこだわりました。特に3Fのルーバーからの間接光による閲覧空間は読書に最適な環境とすることができたと思います。

[折戸]設計者からの説明だけでは理解できないところは、各建材やインテリアなどのモックアップの現物を見ながら確認できたことは良かったですね。図書館職員のほぼ全員がなにかしらのモックアップを見学しています。百聞は一見にしかずと言われますが、説明+体感して認識を高めたことが非常に有意義でした。

[木本]最後になりますが、図書館を通じた期待についてお話をお伺います。

[山崎]図書館の魅力を引き出し、魅力的であり続けるためには、学生の方たちに利用し続けていただくことが一番です。学生の利用を促すような様々な企画に対して、建築計画や空間デザインが柔軟に対応できることを期待しています。またキャンパス全体の外部空間も今回整備した部分からキャンパス全体へと展開してほしいと期待しています。

[田中]この計画の当初、大学側から質問がありました。「図書館におけるデジタル化の進展で、本の存在は変わっていくのか?」と。私たちは、図書館における本の役割があると考えていました。それは、本のにおいを感じ、本に囲まれることで、知識欲を刺激するということ、その「本の力」を最大限に引き出し学生に刺激を与える、セレンディピティ*の高い空間づくりを目指しました。本に近い閲覧席、本が目に入る書架配置、そして、吹き抜けに面した積層集密書架などです。さらに、ラーニングコモンズや交流空間を併せ持った、新しい大学図書館のプロトタイプができたと思います。

[曹]我々はキャンパス整備の中で学生の学びの場や活動の場をつくったり整備したりしています。今回の図書館建設はその一つですが、その中でこれからの学生がどのように施設を利用していくのか、学生自身が建物の使い方を自由に考えアレンジして利用していってもらえたらと思います。そういうことがおそらくいつまでも学生に愛され続ける図書館になると思います。

[折戸]今回の整備計画の狙いの一つに、学生の利用だけではなく、これから明治大学を目指す受験生への関心も期待しています。今、和泉図書館では充分な学習環境や活動環境が整備されました。施設に負けないような、利用者サービスを継続的に、かつ時代の流れと共に新しいサービスの拡大や発展につなげていきたいと思います。

[木本]本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

館内フロア 1階

※セレンディピティ(serendipity):何かを探しているときに、探しているものとは別の価値あるものを見つける能力・才能

館内フロア 2階

明治大学和泉図書館
所在地/東京都杉並区永福1-9-1
開館時間/平日 8:30~22:00
土曜日 8:30~19:00
日祝日 10:00~17:00
URL/http://www.lib.meiji.ac.jp
設計監理/株式会社 松田平田設計

館内の様子

PC設置席

図書館

08 Interview

学生支援を目的とした融合的なサービス

獨協大学図書館（天野貞祐記念館）

話し手　**羽田 洋一**（獨協大学図書館 事務課 課長）
　　澁田　勝（獨協大学図書館 事務課 企画庶務係）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

ICZ（International Communication Zone）

PC貸出・サポートデスク

[木本]今回、獨協大学図書館にお伺いしました。2007年に新館が開館して5年が経過しますが、この5年間の図書館運用全般と自動書庫の運用についてお話をお伺いしたいと思います。

[羽田]獨協大学図書館は、2007年9月に、教室などとの複合施設である天野貞祐記念館内に移転して新図書館としてオープンしました。天野貞祐記念館は、当時の外国語教育研究所、情報センターおよび図書館の教育研究支援に携わる3機関の機能を有機的に統合した、大学の教育研究拠点となる建物です。

図書館の蔵書数は開架・閉架合わせて約87万冊を所蔵しています。資料を主題ごとに各階に配置し、資料・閲覧席・カウンターなど基本的なレイアウトを各フロアほぼ共通にするなど、わかりやすく使いやすい図書館、長時間滞在型の図書館を目指しました。天野貞祐記念館の東側は教室ゾーンとなっており、3階までのどのフロアからでも入館できるので、授業の前後などに利用しやすい構造になっています。（図1）

[木本]利用者サービスの特長についてお話をお伺いします。

[羽田]各階に配置した資料の分野に応じたレファレンス・カウンターを3ヶ所設置するほか、貸出・返却カウンターを2ヵ所に、PC貸出・サポートデスクを1ヶ所におくなど、手厚い人的サポートを展開しています。

最大の特長は、学生支援を目的とした、図書館とは異なる組織が併設されて、融合的な学生支援サービスが実現できていることです。

まず、情報利用環境の面では、館内の情報機器とサポートの充実が挙げられます。図書館内には、各階に分散して多くのPCを設置していて、無線LANを通じて持ち込みPCでのネットワークの利用も可能です。図書館2階に併設された教育研究支援センターのPC貸出・サポートデスクでは、貸出用のノートPCを借りられるほか、図書館のスタッフでは十分に行えない、PCに関するサポートも受けることができます。さらに、隣接しているMM(Multimedia)工房では、動画や音声などデジタル情報の編集加工が可能な機器を揃え、専門のスタッフのサポートが受けられます。

また、獨協大学の特徴である語学教育に関連して、図書館3階には、発話トレーニングブース、語学資料コーナー、AVコーナーを設置して語学学習のためのエリアとしていますが、これに隣接して、語学学習のサポートと交流の場であるICZ(International Communication Zone)があります。ここでは、授業時間外でも、外国語や外国文化に触れることができ、学部・学科・学年を越え、日本人学生も留学生も外国人学生も気楽に交流できる場となっています。

天野貞祐記念館はキャンパスの中央に位置し、学食も隣接しています。学生の生活動線上にあるので、図書館以外の各施設も多くの学生が利用しています。

[木本]なるほど。学生支援がキーワードですね。図書館を活用してもらうためには何か工夫はありますか？

[羽田]入館者数や貸出冊数を見ると、本学図書館の利用は他大学にくらべて多いほうです。これは本学の学生が非常に勉強熱心であるためだと思います。図書館では、施設を整え資料を充実させることはもちろんですが、さらなる利用喚起のために、より多くの学生に有効に活用してもらうための情報リテラシー教育として、各種ガイダンスや授業・ゼミの単位でセミナーを実施しています。

[澁田]ガイダンス・セミナーは3段階で行っています。第1段階は新入生を対象にした図書館の概要や簡単な使い方についてのガイダンスです。第2段階は1年生を対象にした初年次教育です。資料の探し方やデータベースの使い方等、もう少し掘り下げた利用や活用方法に関して知ってもらいます。第3段階はゼミ単位、授業単位でのフリーなガイダンスです。これは先生方の個別の申込を受け要望に沿って実施しており、多くの先生方の授業に図書館のセミナーを取り入れていただいています。

情報利用環境としては、図書館内のPCは常設の144台のほか、教育研究支援センターの貸出用PCが144台ありますが、利用者の要望が年々高まっていることもあって、台数を開館当初よりもかなり増やしています。また、現在はプリンタも無料で枚数上限も設けず利用できる環境にあります。学生は、図書館の資料だけでなくPCを使ってデータベース等も活用しながらプレゼン資料やレポート・論文を作成することが可能となっています。

コピー機・プリンタ

（図1）天野貞祐記念館の構造と分類ごとの配架

5F			教室
4F	自動書庫	ICZ ↔	教室
3F	芸術・言語・文学 ↔	ICZ ↔	教室、CAL教室
2F	社会科学・自然科学・工学・産業 ←	教育研究支援課 MM工房 ↔	教室、CAL教室
1F	総記・哲学・歴史 ↔	エントランス ↔	※
	西／図書館ゾーン	中央／ICZ	東／教室ゾーン

天野貞祐記念館は次の様に構成されている。
東に教室ゾーン
中央にICZ（International Communication Zone）
西に図書館ゾーン
各階より、図書館へのアクセスが可能。

※保健センター、キャリアセンター、国際交流センター、獨協歴史ギャラリー、カフェなど

08 学生支援を目的とした融合的なサービス

獨協大学図書館

今後も図書館では利用者の情報利用環境の充実とともに、学生の学習や研究活動の支援を行っていきたいと考えております。

[木本]レファレンス・カウンターが各階にあるとのことですが？

[澁田]資料や情報の探し方をサポートするためのレファレンス・カウンターを3階までの各階において、全専任職員で対応しています。各々の職員が担当主題を持ち、主題別に分かれている各階のレファレンスカウンターに入るようになっています。また、即答できず、継続調査が必要となった質問については、全専任職員に対して情報共有を行い、全職員がそのフォローを出し合うことで、回答を作成していきます。これにより、職員のスキルアップも目指しています。

[木本]職員の方は何名いらっしゃいますか？

[澁田]現在の図書館専任職員は18名です。各人が担当主題分野の資料選定も行っています。カウンター業務と選書の主題が結びついていますので、アメリカなどで見られる、学位を修めた専門家とまではいきませんが、サブジェクトライブラリアンに近づくための第一歩といえるでしょうか。自分の主題を意識しつつ業務を行いますので、多少なりとも担当している主題に強い職員が成長してきていると思います。

[木本]ラーニング・コモンズについてはいかがでしょうか？

[澁田]当館では特定の場所を指してラーニング・コモンズという名称は使していませんが、図書館単独ではなく、図書館を含めた天野貞祐記念館全体でラーニング・コモンズが持つべき要素を備えているのではないかと思います。図書館としては、新図書館で利用者サービスや学習環境を整備し、利用者の多様な要求に応じたゾーンニングを行ったことで、「滞在型図書館」が実現できているのではと考えています。

[木本]利用者サービスの課題についてお伺いします。

[羽田]今後の図書館の課題として、図書館が積極的な姿勢をもって利用者サービスを広げることが必要だと思います。例えば、選書ツアーや読書会、ビブリオバトル等、学生が自主的に参加する企画です。それには学生自らが参画する雰囲気づくりが欠かせません。これからの図書館は資料や場所を提供するだけではなく、学生が自主的に考え、企画・実施することで成長できる機会を提供していく必要があると考えています。

また、本や雑誌といった紙媒体だけではなく、電子ジャーナルのほかデジタル資料の提供にも舵を切っていく必要がありますが、まだ十分な取り組みができていません。今後の課題として残っていると思います。

[木本]自動書庫の現在の利用状況はいかがでしょうか。

[羽田]1日の出庫は平均50～100件程度です。蔵書の半分である40万冊を自動書庫に格納していますが、自動書庫に格納しているのは主に古い図書や利用頻度の低い資料です。たとえば雑誌は3～4年の年限を決めて、古くなったものを随時自動書庫に格納しています。利用者からの出納要求があると、カウンター内に出庫されますので、カウンターの業務委託スタッフが取り出し、利用者に提供しています。

[木本]自動書庫についての当初の期待値と稼働後の評価についてお伺いします。

[羽田]導入前は、一部の教員や職員から、直接資料をブラウジングできなくなる点について懸念の声が上がりました。旧図書館の書庫では、教員も図書館職員も、ブラウジングにより周辺の関係図書を見つけることができましたが、自動書庫の場合は、蔵書検索（OPAC）画面での書誌情報をキーに1冊ずつ出庫して確認しなければなりません。導入から5年経った今では、不満の声は聞かなくなりましたが、資料の探し方が変わったことは確かです。

[澁田]自動書庫にある資料を探せないために、開架にある資料だけでレポートを作成したりしている学生がいると思います。せっかくある資料が活用されないのは残念なことです。自動書庫の資料を活用するには、蔵書検索（OPAC）を使いこなすことが必要不可欠です。タイトルや著者名だけではうまく見つからないケースもありますが、分類や件名などを活用して検索することで、直接のブラウジング以上に効果的・網羅的に資料を発見できることもあります。そのためには資料整理の段階でのデータの精度の向上と蔵書検索（OPAC）システムの機能向上が重要になってきます。資料を提供する側、利用する側の共通理解がなければ、自動書庫資料が十分活用されず死蔵される可能性はありますね。そのため、利用者教育のなかで蔵書検索（OPAC）の使い方を十分に理解してもらうとともに、使いやすいシステムとしていくことが、自動書庫を活用するためにも重要です。

自動書庫を導入することで、同じスペースでの資料の収容能力が格段に上がります。また、資料管理も適切に行えるので、比較的利用が少ない資料を自動書庫に収納することで、膨大な書庫スペースを抱える必要がなくなり、その分、利用者に開放するスペースを確保することができました。ただ、自動書庫を採用するかどうかで、利用者の使い勝手は大きく異なってきます。導入に際しては、増え続ける蔵書を管理するための施設設備や各種サービスのための人的資源、そのための費用等を勘案した図書館運営全般に関する判断が求められます。これは各大学や図書館の事情によって異なると思いますので、どちらがベターかは一概には言えませんね。

[木本]最後に、自動書庫の運用について課題をお伺いします。

自動書庫

出納ステーション

図書館情報セミナールーム

[羽田]どんなシステムで管理されているとはいえ、やはり人間が操作するので、人的ミスにより資料が行方不明になる可能性はゼロにはできません。

[木本]どのような状況で起こるのでしょうか？

[羽田]過去、大量の入庫作業を行っていた時など、エラー防止メッセージやブザーを無視して、強制的に入庫ボタンを押しコンテナを入庫してしまったことがあったようです。またたいへん薄い雑誌が他の雑誌に挟まってしまった状態で、そのまま格納されていたこともありました。ほかに、資料に複数の資料IDが貼ってあるのに、1つのみを読み込んで入庫してしまった例などもあります。雑誌は固定コンテナを採用して、同一の雑誌が同じコンテナに収まる運用にしているので発見されるケースが多いのですが、なかには見つけきれず不明本となるものもあります。

[澁田]自動書庫の場合、基本的にはシステム管理されていますので書庫の中に格納されていることが前提ですが、一度出庫した後、貸出もされず、自動書庫にも戻っておらず、不明本となるケースがあります。出庫請求した際に、「既に取り出し済み」という表示が続いたり、自動書庫に戻らず開架書架にまぎれていて発見されることで、不明本状態にあることが初めて発覚します。このような出庫後の不明本についても気をつける必要があると思います。

[木本]確かに人的ミスについては課題が残ります。あるユーザー様ではデイリー・ウイークリー・マンスリーとチェックしながら、業務の一環として不明本の確認をされていました。

[澁田]たとえば「出庫から一定期間を経過して戻ってきていない図書のリスト」や、「出庫実績ベスト100」みたいなリストが簡単に出るといいですね。利用頻度が高い資料は開架に出したり、今後の資料選定の参考資料としても活用できそうです。

[木本]本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

特集コーナー

発話トレーニングブース

獨協大学図書館

所在地／埼玉県草加市学園町1-1
開館時間／月～金曜8:45～22:00、土8:45～20:00、
春季・夏季休業期間9:00～20:00、
休日開館日10:00～20:00
休館日／日曜・祝日、夏季一斉休業期間（8月中旬）、
年末年始、入学試験日
URL／http://www.dokkyo.ac.jp/library/

館内の様子

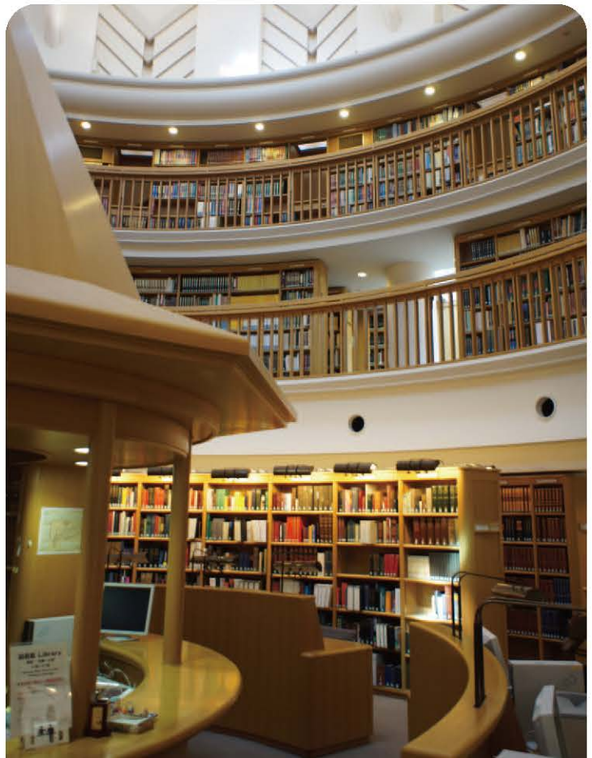
図書館

利用者を熟知した「こころ」を打つサービス

09 Interview

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
話し手 秋庭 公代
（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国際日本文化研究センター 情報管理施設 資料課 課長）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）



[木本]国際日本文化研究センターの概要についてお伺いします。

[秋庭]国際日本文化研究センター（以下、日文研）は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の6機関のうちの1機関です。昭和62年（1987年）に創設し、今年5月に創設25周年を迎えた日本文化研究機関です。その研究は、単に日本という地域の文化研究を行うのではなく、「世界の中の日本」、「アジアの中の日本」といった幅広い観点から日本を捉え、従来の学問領域の垣根を越えた発想を大切にしているという点に特徴があります。また、加えて世界の日本研究を支援することを重要な使命としています。

具体的な活動としては、次の4つが挙げられます。

1つ目は、共同研究です。国内外の大学等に所属する研究者が参加する共同研究会を主催し、特色のある様々な研究テーマに取り組んでいます。この共同研究は、一つのテーマにつき約3年の期間に行われます。平成24年度は19の研究課題について共同研究がなされ、これらの成果を発表する国際研究集会も随時開催されています。

2つ目は、外国人研究者の招聘と研究支援です。海外各地域から、日本研究者を公募し、年間15名ほど招きそれぞれのテーマにおける日本研究の進展を多面的に支援しています。

3つ目は、国際研究協力です。海外の日本研究者への支援のため、海外でのシンポジウムや「日本研究会」などの国際的研究協力活動を行っています。

4つ目は、教育事業です。総合研究大学院大学（博士後期課程）の文化科学研究科国際日本研究専攻が設置されています。国際日本研究専攻の大学院学生は、人文科学・社会科学・自然科学に渡る国際的・学術的な日本研究を行っており、日文研は優れた日本研究者の育成活動も行っています。

[木本]図書館の役割についてお伺いします。

[秋庭]私たちの図書館では先程お話しした日文研の使命を果たすために、日本研究の研究者の研究活動や大学院教育活動に必要な研究資料や情報の提供を行っています。日本研究に必要な参考図書やそれぞれの研究テーマに基本的に必要な「基本図書」に加えて、特徴的なコレクションを数多く所蔵し、収集しています。

[木本]特徴的なコレクションとは何でしょうか？

[秋庭]創設時から収集している日文研の柱となるコレクションは、当センターで、「外書」と呼んでいる「外国語で書かれた日本研究書」（以下、外書）です。その他にも近世風俗資料（名所図会、艶本、妖怪絵巻、鯰絵等）、古地図や幕末明治期の古写真があります。日文研ではこれらのコレクションの電子化を設立当初から推し進め、現在では様々なデータベースが作成され、日文研のホームページから公開されています。多くの貴重な資料が公開されていますので、是非、ご覧ください。

[木本]さて、2010年に「第二図書資料館（外書館）」（以下外書館）が建築され続いて2012年に貴重書室が改修工事により増設されています。これらの新しい施設の整備計画に当たって配慮した点についてお伺いします。

[秋庭]蔵書数の増大で保存スペースの狭隘化が顕著となったことへの対策として、以前より外書館の建設を計画していました。その際、配慮したポイントは、①資料保存環境の整備、②省エネ、③地震対策、④利用者利便性の向上です。

まず、外書館についてお話しいたします。資料保存環境については、まず、温湿度管理があります。カビの発生しやすい環境であった1階には除湿装置を壁内

●コレクションの一部

外像［（武家の）婚礼］

古写真［髪結い］

鯰絵［鯰を押える鹿島大明神］

（国際日本文化研究センター所蔵）

に設置し、併せて各階書架を中心に温度湿度計を置き日々計測、記録しています。また、紫外線による資料の劣化を防ぐため、開架エリアの窓には紫外線防止シールを貼り、加えて紫外線防止仕様のレールカーテンも採用しました。他にも図書の倒れからくる資料のゆがみや傷みを防ぐために磁石式のブックエンドをこまめに置いています。

省エネの点では、照明に人感センサーを採用しています。

地震対策においては、電動集密書架を免震構造とし、書架の転倒を防ぐ仕様としました。

利便性の面では、各階に無線LANを設置しインターネットへの接続環境を整えました。また、蔵書数とスペースを考慮し、多くの電動集密書架を導入していますが、安全バーに加えセンサー感知式とし、利用者が書架から退出したタイミングで自動的に書架の開口部の占有が解除されることで利便性の向上も付加できました。

次に貴重書室の増設についてお話しいたします。新しい貴重書室は、1994年に建設された「図書資料館」の3階に位置しています。貴重書の電子化作業を行う「情報工房」を同じフロアに設置するプランに基づいた改修により従来の貴重書室に加えより広い「貴重書室2」を設けることができました。このことによって今までの貴重書室に入りきらなかった貴重資料は全て収めることができ、ほっとしています。新しく増設した貴重書室は、紫外線の出ない蛍光灯を採用し、地震対策として書架に落下防止用バーを設置、湿度管理として、壁面に湿度調整ボードを貼ることや書架の側板にパンチング孔を開けたものを採用しました。

[木本]温度・湿度測定はどのように実施されているのですか？

[秋庭]開架エリアの各所にデジタル式の温度・湿度計を十数個配置しています。日々、職員が測定値を記録し、館内の温湿度をチェックしています。このデータを積み重ね今後の適切な資料保存環境の参考にしていきたいと思います。

[木本]本誌の今回のテーマとして「感動できる利用者サービスの工夫」を掲げています。どのようなサービスに取り組まれているのか、ご紹介願います。

[秋庭]感動できる利用者サービスというテーマを伺って、最初はとても華々しい特別なサービスのことかと思い戸惑ったのですが、これは、「利用者のこころを打つサービス」という意味と捉えられるのではないかと思います。言い換えれば「利用者を知っているサービス」です。

日文研の図書館を訪れる研究者は、非常に広範囲かつ多岐に渡る研究テーマを持っています。日文研では、これらの利用者に対して、研究に必要な資料や求める情報をきめ細いコミュニケーションをもとに把握しサービスをしていくというこれは創設当初からの良き伝統があると思います。日本研究者及び日本研究者を志す利用者一人一人にそういった姿勢で臨むといった伝統を今後も生かしていけば、「感動できる利用者サービス」が見えてくるのだと思います。

また、海外の日本研究者という「利用者を知る」ためには、世界の日本研究の状況、研究施設や日本資料の状況について知ることが大切です。日文研では、毎年、欧州で開催される日本資料専門家欧州協会総会(EAJRS)に研究者とともに図書館職員を派遣し、所蔵している日本研究資料の紹介や人的ネットワーク作りを行っています。こうした機会を通じて「利用者を知る」とともに「利用者に知ってもらう」努力をしていきたいと思います。

[木本]最後に、今後の展望についてお話をお伺いします。

[秋庭]まずは日文研の特徴あるコレクションを一層充実させていきたいと思います。

発展性としては、コレクション形成の中核である外書の資料収集について、ヨーロッパや北米の資料が充実していますが、より多言語を視野に入れ、東アジア地域の日本研究書の収集にも力を入れていきたいですね。また、コレクションをはじめとした資料の保存環境への取り組みも一層整えていきたいと思います。さらに、大学共同利用機関として、内外の日本研究者を支援するため、日本研究の研究支援拠点として日文研図書館の存在と資料についてより広くアピールし情報を発信してまいりたいと思います。

[木本]本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

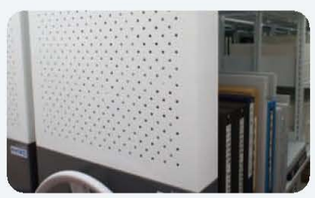
●図書資料館の館内

磁石式ブックエンドをこまめに配置

温度・湿度計にて日々計測と記録

●貴重書室2の室内

落下防止バーの設置



パンチング孔を開けた側板

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
国際日本文化研究センター
所 在 地／京都市西京区御陵大枝山町3-2
開館時間／月曜日～土曜日 9:00～17:00
休 館 日／日曜日・祝日・年末年始
U R L／http://www.nichibun.ac.jp/

交流ラウンジ壁面

図書館 10 Report

人がつながる、アイデアが生まれる 会員制ライブラリー「BIZCOLI」

財団法人 九州経済調査協会・BIZCOLI

岡本 洋幸（財団法人 九州経済調査協会 事業開発部 主任研究員）

会員制ライブラリー「BIZCOLI」（読み方：ビズコリ）は、2012年4月に福岡市渡辺通にオープンした。BIZCOLIは意欲的なビジネスパーソンが集い、新たなビジネスを育むことで企業や地域に貢献する「知の集積・交流・創造」拠点を目指している。「BIZCOLI」とはビジネス（BIZ）とコミュニケーション（COMMUNICATION）、そしてライブラリー（LIBRARY）の頭文字を組み合わせた造語である。

1. シンクタンク「九経調」が運営

BIZCOLIは、シンクタンク、財団法人九州経済調査協会（略称、九経調）が運営している図書館である。九経調は昭和21年の設立以来、地域経済のデータや書籍を収集しており、それらを活用した会員向けの経済図書館を運営してきた。この経済図書館は、利用者が必要な情報を得ることに加え、職員がシンクタンクとしての専門的な立場から経済の疑問質問に答えてきた。

九経調は2012年4月、福岡市の大名から渡辺通の電気ビル「共創館」に移転した。共創館は2012年2月に竣工したオフィスビルで、九州を代表する経済団体が入居している。経済団体の職員の利用や共同のイベント開催に加え、天神と博多の中間に位置する立地によって、九州全域から多くの来館が期待されている。

2. 「知の集積・交流・創造」拠点にむけて

経済図書館はインターネットの普及とともに、利用者が年々減少していたこともあって、「共創館」への移転を機に名称やコンセプト、レイアウトを大幅に見直した。BIZCOLIはビジネスパーソンの交流と、その交流から生まれる人脈形成やアイデアの創出に力を入れている。コンセプトは九州における「知の集積・交流・創造」拠点であり、コンセプト実現のために以下の3つの機能を利用者に提供している。

①ビジネスの最新情報・アイデアの提供

BIZCOLIでは、書籍・映像、研究会等により、ビジネスに役立つ最新情報やアイデア・ヒントを提供している。業界の変化や収支モデルがわかる書籍、業界の最新動向が把握できる専門雑誌をそろえている。新聞・企業・人事データベースの「日経テレコン21」を導入し情報収集のスピードアップをはかり、ビジネススクールとの協力により企業経営やマーケティング関連書籍を充実させている。情報の鮮度を重視し、書籍は刊行後5年までのものを中心に開架している。書籍の情報はどんなに新しくても、刊行されるまでに数カ月経過することもあって、自治体や企業の公開資料、新聞記事を展示し、ビジネスマンが最新の情報に触れることができるように工夫している。

アイデアの創出や思考を深めるしかけとして、ブックディレクター幅允孝氏の協力のもと「ビジネスパーソンが仕事の原点を考える」書籍コーナーを設け、発想法やデザイン関連の書籍をそろえた。九州の発展にむけて必ず知っておくべき基礎的な資料や書籍をならべており、九州経済の課題と方向性が一目でわかる「九州経済・発展戦略マップ」を展示している。また、地元企業や行政とのコラボにより、ユニークな地元企業の映像放映、デザインに優れた製品、古地図や絵画などを展示している。

交流ラウンジ

②ビジネス人脈の形成

BIZCOLIでは利用者同士、利用者と当会研究員との人脈形成を促進するために、セミナー・交流会を1週間に1～2回開催している。シンクタンクとしての調査研究成果の発表に加え、企画力やビジネススキルの向上に役立つ「事業セミナー」、文化教養を修得するための「まちセミナー」をスタートさせた。その他、BIZCOLI以外の企業や団体のセミナーでも、コンセプトにフィットする内容であれば会場の提供や集客で協力している。さらに会員の興味あるテーマに基づいて、BIZCOLIスタッフが会員同士の交流促進に努めている。

③スキルアップのための個室空間の提供

近年、街中のカフェでは、ビジネスパーソンがパソコンを持ち込んで作業をしている姿をよく見かける。公共図書館は開館時間、立地など、多忙なビジネスパーソンにとっては利便性に欠け、知識習得や企画書作成等に集中できる空間もない。BIZCOLIでは15のブースを設け、静かに集中できる空間をつくっている。

3. レイアウトとサービス

交流ラウンジの窓は床から天井までガラス面になっており、光を取り入れる開放感のある空間となっている。また、壁は本の背表紙が壁面から数センチ飛び出しており、BIZCOLIの象徴的なデザインとなっている。ラウンジの中央にはバーカウンターを備え、イベント開催時にアルコールを提供することもできる。ラウンジは打合せや懇談だけでなく、イベント会場としても利用される。企画展示ゾーン（「知の回廊」）には天井まで続く書棚があり、映像放映や製品展示を行い、優れたデザインやアイデアにふれることで、みる者の感性を刺激している。

ミーティングルーム

閲覧ゾーンの（「知の森」）には書籍1万冊（別置きの閲架書庫に約19万冊を所蔵）とともに、1950年代に設計されたシンプルなデザインの椅子26脚がある。会員専用のミーティングルーム（24名収容）は、長さ約7メートルの巨大ホワイトボードがあり、勉強会やワークショップに利用されている。マイデスクゾーン（個室）には、人間工学に基づいて設計された高機能チェア15席が設置され、長時間の業務・仕事に集中できる。月単位で契約できるロッカーも準備している。

書架では、利用者が書籍を手に取っていただくための工夫をしている。スペースの許す限り書籍の表紙を見せる形で配架し、関連の新聞記事、図表、写真、模型をあわせて並べ、利用者の好奇心を刺激している。また、ビジネスの緊張を弛緩するしかけとして、レゴなどの玩具、飛び出す絵本、図鑑、写真集をそろえており、交流ゾーンにはクラッシック音楽やJAZZが流れている。

BIZCOLIは賛助会員からの会費で運営されており、20歳以上のビジネスパーソンをターゲットにしている。当会賛助会員企業・団体に所属されている方は、平日10～18時までは無料で利用できる。18時以降の利用については、月額・個人4,000円の利用プランが用意されている。このほかに一般向けの利用プラン（月額・個人6,000円～）、1日利用プラン（1日1,700円～）がある。なお、空間デザインや什器選定においては、地元デザイナーの協力を得た。

4. 図書館の既存概念を超えて

オープンから半年が経過し、1カ月の利用者数は約800名と順調に増加している。イベント参加者や会議室利用者を加えると、毎月約1,000名が来館していることになる。

マイデスクゾーン

知の回廊

9月には、九経調のオフィス部分とあわせて日経ニューオフィス賞を受賞した。知の交流拠点づくりにむけたソフト面での多様な取組みに加え、宮崎・新燃岳の火山灰を混合した煉瓦、佐賀・七山の和紙を利用した照明器具など、地元の素材や伝統工芸品を活用した内装や什器が評価された。

これからも、地域のビジネスや経済に密着した図書館を実現したいと考えており、今後、利用者同士が情報やノウハウを共有するコミュニテイの形成を目指すことにしている。同じ興味を持ったグループや同様の資格取得を目指す人の集まりといった、多様なコミュニテイの形成によって、ビジネスの質を高めることに寄与したい。また、マーケティングの勉強会やビジネススクールの同窓会などの誘致を検討中である。

全国的にも、BIZCOLIと同様の機能を持つ施設は存在しておらず、図書館の既存概念にとらわれない、新たな知の拠点として挑戦を続けていく。

財団法人 九州経済調査協会
BIZCOLI
所 在 地／福岡市中央区渡辺通2-1-82
電気ビル「共創館」3階
T E L／092-721-4909
開館時間／10:00～22:00（土曜日10:00～18:00）
休 館 日／日曜日・祝日
U R L／http://www.bizcoli.jp/
http://www.facebook.com/bizcoli

写真は（財）九州経済調査協会提供

文化施設 Report

1 新宿分館の筑波移転と自然史標本棟の建設

独立行政法人 国立科学博物館

倉持 利明（国立科学博物館 動物研究部 海生脊椎動物研究グループ グループ長）

（独）国立科学博物館（以下、科博）の新宿分館（東京都新宿区）は、平成24年4月、筑波地区（茨城県つくば市）に移転しました。その結果、5研究部による研究機能と400万点を超える所蔵標本・資料が集結し、筑波研究施設として新たにスタートしました。それに伴い、自然史標本棟と総合研究棟が新築されました。

これまでの科博から筑波研究施設へ

科博は上野（東京都台東区）に本館をおき、新宿分館、筑波地区、付属自然教育園（東京都目黒区）から構成されていました。そのうち新宿分館には、動物・地学・人類・理工学の4研究部があり、同時にその資料が所蔵されていましたが既に過飽和状態にあり、資料の一部は、植物研究部と実験植物園がある筑波地区の資料庫に分散して所蔵されていました。

そこで私たちは、分散所蔵を打開して効率的な研究を行うこと、研究部の枠を超えた新しい横断的な研究を行なうこと、さらに事務業務を集結して効率化をはかることなどを掲げて、筑波地区への移転を決断し電光石火の勢いでそれが実現しました。自然史標本棟と総合研究棟が竣工し、既存の資料庫2棟が改修されて理工学資料棟に生まれ変わると、いよいよ標本・資料と研究室の大移動が始まり、やがて平成24年4月、筑波研究施設が始動しました。

自然史標本棟の概要

自然史標本棟には、約200万点の動物標本、約24万点の地学標本、16万点余りの人類標本を収蔵し、植物・菌類標本約170万点の一部を収蔵しなくてはならず、かつ今後約10年間に想定される標本増分を収蔵するよう設計されました。収蔵する標本の形状は多様で、動物の剥製や骨格、液浸標本、昆虫や貝類などの乾燥標本、岩石・鉱物・化石などの重量物、人骨、植物の押し葉標本などが含まれるため、床面積と天井高を最大限に活用して収蔵能力を高めるとともに、標本の形状・性状、管理条件にそれぞれ対応した構造が求められました。さらに一部公開型の収蔵室（収蔵展示室）を設けました。

中でも圧巻なのが液浸標本室です。液浸標本とは、標本をエタノールなどの液体の中で保存するもので、科博では古くから魚類、無脊椎動物、蜘蛛類、哺乳類、両生・爬虫類、鳥類など様々な動物の液浸標本を収集してきました。そのため、数が膨大なだけでなく容器の大きさや材質も様々な液浸標本が、新宿分館の複数の標本室に分散しており、研究者はこれらを一同に収蔵できる標本室を待ち望んでいました。それを実現したのがこの液浸標本室で、床面積約1,000平米のフロアー全体に、移動棚（間口900mm・奥行き500mm・高さ3,100mmのオープン棚を8連×70列、10連×70列）配置しました。移動棚の駆動方式には、科博の標本室では初めての電動式を採用しました。液浸標本の性状は様々で、非常に脆弱で衝撃を嫌うものも多く含まれることから、緻密にマイコン制御されたシステムを用い、スロースタート・スローストップが最適化される条件設定を行ないました。

貝類の乾燥標本室（貝殻標本を収蔵）も見事な出来栄えです。科博のこの分野は、河村コレクション（河村良介氏（1898～1993年）収集）、櫻井コレクション（櫻井欽一博士（1910～1993年）収集）という世界屈指の2大コレクションのほか、歴代研究者が採集した膨大な標本を所蔵しています。ところが新宿分館では、それらがコレクションごとに収蔵されており、分類群ごとにコレクションを再構成したいというのは研究者の長年の夢でした。それを実現すべく設計されたのが、天井高いっぱいにスチール製の引き出しを重ねた移動棚でした。地震等による引き出しの飛び出しを防ぐために、強力マグネットによる安全策も講じてあります。

昆虫標本室も、貝類乾燥標本室と並んで収蔵能力を著しく向上することができました。昆虫標本は、ドイツ箱とよばれる完全に規格化された標本箱に保管されているため、科博では従来からドイツ箱を積層して収納するキャビネットを採用してきました。このキャビネットを新調して移動棚に設置し、さらに新宿分館で使用していたものも動員することでこれまでの2倍近い収蔵能力を確保しました。

ナショナルコレクションとしての科博の標本・資料

科博の標本・資料収集のポリシーは、日本およびその周辺地域・海域の自然史標本と科学・技術史資料をはじめとした理工学資料を収集し、ナショナルコレクションの構築を目指すことにあります。科博のコレクションは量的に膨大なだけでなく、生物分類学の基礎となるタイプ標本、絶滅種や絶滅危惧種の標本、生きている絶滅危惧植物、さらに理工学資料では重要文化財を含んでいます。もちろん、珍奇なるものだけを収集するのではなく、ありふれた普通種の収集にも努めており、質・量ともに我が国の最高水準にあります。

しかし、収集、保存・管理、研究が一体となってはじめてその水準が維持されるものです。今回の筑波移転、とりわけ自然史標本棟の新築と、既存の標本庫を理工学資料棟へと改修したことにより、標本・資料の保存・管理の質が劇的に向上しました。最高水準にある標本・資料を収集、保存・管理を行ない、それらに基づき広範な研究を展開すること、さらにそれらの研究成果に基づき展示や教育普及活動を行うことが、ナショナルコレクションを擁するナショナルミュージアムの責務です。科博は筑波研究施設を得ることにより、ようやく世界屈指の名門博物館の一つとして歩き始めました。

多様な動物の液浸標本を収蔵する液浸標本室。

高層化により著しく収蔵能力を高めた貝類乾燥標本室と昆虫標本室。

広大な実験植物園の一角に新築された自然史標本棟①と総合研究棟②。研究管理棟③、植物研究部棟④、資料庫2棟⑤は既存の施設で、資料庫は理工学資料棟に改修された。

鯨類ほか大型哺乳類を収蔵する収蔵展示室。実験植物園の来園者は、ガラス窓越しにこの風景を目の当たりにする。

電動棚の駆動試験。棚には標本に見立てた鉄をのせて加速度センサーを設置し、マイコンの設定を最適化した。

独立行政法人
国立科学博物館（上野本館）
所 在 地／東京都台東区上野公園7-20
開館時間／9:00～17:00
休 館 日／月曜日（祝日と重なれば火曜日）、年末年始（12月28日～1月1日）
U R L／http://www.kahaku.go.jp

文化施設 12 Report

小さな博物館の☆になれ

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 飛鳥資料館

成田　聖（奈良文化財研究所 飛鳥資料館 学芸室 研究員）

私どもの飛鳥資料館は昭和50年(1975)に開館した、奈良文化財研究所の博物館です。6世紀に飛鳥寺が建立されてから藤原京を経て、8世紀初頭に都が平城京へ移るまでの間を飛鳥時代と呼んでいますが、この時代の飛鳥・藤原地域における奈良文化財研究所の研究成果を展示すること、そしてこの地域へ来られるお客様達のガイダンス施設としての役割を果たすことが当館の建てられた目的です。これまでに400万人以上のお客様がご来館され、その役割を十分に果たしてきました。

しかし、当館は開館以来37年が経とうとしており、様々な問題が出てきています。老朽化に関るもの、社会のニーズや時代の変化、来館者の減少と高齢化など、問題は数えだしたらきりがありません。そのどれもが深刻な問題で解決は一筋縄にはいきません。

そして当館は小さな博物館ですので、国や県の大きな博物館と比べると、どうしても人的にも予算的にも限りがあります。さらに僕自身も、一人で沢山の仕事があります。しかし、飛鳥には遠方からも沢山のお客さんがお越しになります。遠足で子供達が訪れます。何度も来ていただけるリピーターの方々がいます。こうした方々に少しでも喜んでいただくために、飛鳥で楽しく歴史に接してもらうために、どんな理由や困難があろうとも、良い博物館にしていかねばなりません。そして、「良い」という状態を長く維持していかなければなりません。一部のマニアや研究者にだけ好まれるような施設ではなく、子供から大人まで幅広く飛鳥の文化や歴史に楽しんで接していただき、この地域を研究する意義と成果を多くの人に知ってもらうような姿が当館の本質的なあり方だと思っています。こういった良い展示の根底には、もちろんそれを下支えする研究、展示公開、収蔵環境、何よりも働く人々の志が無ければ始まりません。ですが、素晴らしい展示はどうしたら創ることができるのでしょうか。大きな博物館にしかできないのでしょうか。僕はそんなことは無いと思ってます。

僕が目をつけたのは、「これが普通、これが常識」という部分です。皆さんが考えている常識は本当に正しいものでしょうか。「これが当たり前・昔からこうやっているから」という部分に大きな落とし穴があると僕は思っています。それを決めた当時は意味があることだったのかもしれませんが、現在においてはさほど効果が無かったり、社会のニーズが変化していたり、極端な話で言えば、誰かが決めた最初の常識が間違えているかもしれません。小さな博物館で様々なことにお悩みの学芸の方、博物館に関る何らかのお仕事やボランティアをされている方々、皆さんの苦労は、博物館業務に関る一人として十分にわかっています。毎日様々な工夫を凝らしていらっしゃると思いますが、あえて「常識」に挑んでみてはいかがでしょうか。何かがガラリと変わるかもしれません。閉塞的な現状の打開を求めるならば、これまでの常識に挑むぐらいの覚悟が必要だと思っています。そして、いつまでも「常識」に対して挑み続ける姿勢が必要だと思っています。

ダイナミックに常識や構造を改革する他にもやれることは沢山あると思います。僕も仕事で地方の小さな博物館に行くことが多いのですが、日本全国のどこも人・時間・お金が足りずに困っているのを目の当たりにしてきました。ですが、アレがないコレが無いから何もできない！と言っている間にもできることは沢山あります。もちろんちょっとしたことです。館内の隅っこの埃をきれいにする、剥がれた壁紙に糊をつけて直す、展示物を見て首をかしげている人に解説してあげる、古くなった看板をパソコンで作り直してみる、休みの日に何かイベントを開いてみる。そうした、「ちょっとしたこと」の積み重ねが最後には大きな差になるのではないでしょうか。

そして心がけて欲しいのは、社会的に自分達の博物館がどう見られているか？と客観視することです。もし、自分が一般の人だったら自分の博物館に来るかな？家族・友人・恋人を自分の博物館に連れてこようと思うかな？自分が子供だったら遊びに来るかな？そうした客観性を踏まえると、いろんなことが見えてくるような気がしませんか？

また、組織内での仕事の進め方も気を配らねばなりません。仕事に関る人を多くすれば、作業人員・意見・アイディアは増えるでしょう。しかし、意見や好みがまとまらず、みんなの意見を取り入れるうちに、発案した段階での個性がだんだんと打ち消され、果てには最初の意義が薄れ、これといって特徴の無い平凡な仕事になってしまったご経験はないでしょうか。そうならないためには個人～少人数で思い切ってやる仕事、大人数で協力して成し遂げること、目的や仕事量などを勘案して、関るべき人数を判断しなければいけません。何でもかんでも1人で作業、逆に全てを皆で薄く作業というやり方では、必要以上の困難に出会ったり、いいアイディアを生かせなかったり、満足できる結果は生まれないと思います。個のメリット・組織のメリットの二つをうまく組み合わせるべきです。

仕事で遭遇する種々の問題の中には、一定の猶予期間を過ぎると、残念ながらどうにもならない手遅れという事態があります。そうならないためには、自分自身の仕事の優先順位がみえてくるはずです。何が何でも「今」やり遂げなければならないこと、逆に回りに迷惑をかけてでも延期しなければならない仕事、極論的には中止するという判断もありえると思っています。ダイナミックな発想と実行力、組織の使い方、仕事の優先順位の判断、日々のちょっとした工夫、一見するとあたりまえのようですが、これらの常識に挑んでみると、皆さんの博物館を取り巻く様々な環境が大きく変化するのではないでしょうか。改革を人任せ・政治任せにしてはいけません。まず自分からです。

飛鳥資料館は昨年度から2～3年かけて大改装を進めています。僕は、この改装を単なる内装と展示物のリニューアルという意味では捉えていません。無駄を省き、必要なところには予算をつけダイナミックに更新。他機関、民間企業、ボランティアとの新たな連携。速報性や柔軟性。何十年先を見通してやるべきこと・心がけるべきことは山のようにあります。そして、ソフト・ハード面での改革を成し遂げ、中小規模博物館の成功事例として全国に飛鳥資料館を紹介できるような、小さな博物館の☆にしたいと考えています。

当館は、さまざまな新たな試みに挑戦しています。飛鳥の地域や文化までをも巻き込むような変革へ挑戦したいと思っています。これらの改革を「改悪」ではなく、恒久的に続く「改良」にしなければなりません。飛鳥の今後に期待していてください。

飛鳥資料館の外観

重要文化財 山田寺東回廊

写真コンテスト入賞者へ「飛鳥資料館官位」の授与

展覧会へ見学に来た子供達

細野元気さんが率いるWORLD ORDERとコラボした「光の回廊2012 ―甦る古の記憶―」

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 飛鳥資料館

所 在 地／奈良県高市郡明日香村奥山601
開館時間／9:00～16:30
休 館 日／毎週月曜日（祝日と重なれば火曜日）、12月26日～1月3日
U R L／http://www.nabunken.go.jp/asuka/

文化施設 13 Interview

発掘成果や体験交流等を通した縄文文化の発信

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

話し手　宇部 則保（八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 副参事）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[木本]八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館の概要についてお伺いします。

[宇部]八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館（以下、是川縄文館）は、国の史跡である是川遺跡に隣接され、縄文出土品を現地で見学いただける施設です。これまで是川遺跡の施設として、是川考古館（昭和38年建設）、八戸市歴史民俗資料館（昭和50年建設）、八戸市縄文学習館（平成6年建設）がありましたが、施設が狭い上、老朽化も深刻になり、環境の整った保存と展示施設が求められことになりました。平成9年に「是川縄文の里整備基本構想」が策定され、是川縄文館の建設に着手し、平成23年に開館しました。

施設の大きな機能に2つがあります。1つが是川遺跡や風張遺跡を通して国内でも有名な八戸の優れた縄文文化を発信すること、もう1つは埋蔵文化財センターですので市内の埋蔵文化財の発掘・調査研究、出土文化財の記録・整理保存などを行いながら、市民への教育普及活動を行っています。

[木本]是川縄文館の特長についてお伺いします。

[宇部]是川遺跡は低湿地だったため出土文化財の多くは木製品でした。木製品には漆塗りのものが多く、考古学的にも重要な場所になっています。その素晴らしい出土品を展示するに当たり、常設展示の構成では2つの柱を考えました。

1つ目が美術工芸品の様な展示手法を取り入れ、来館者へじっくりと見て頂きたいスペースと、もうひとつが発掘現場の再現をイメージさせ、遺跡の様子を学べるスペースです。さらに国宝の合掌土偶を展示する専用の部屋「国宝展示室」を設け、多くの来館者を魅了しています。常設展示には最新の調査研究の報告も展示し、市民や来館者が八戸の魅力を再発見し、誇りや愛着が感じられるように努め、埋蔵文化財の重要性を伝えています。

[木本]館の体制についてお伺いします。

[宇部]是川縄文館は埋蔵文化財センターですので、埋蔵文化財の保護と調査・研究、公開活用を担っており、2つのグループで構成されています。1つは縄文の里整備推進グループで、展示や教育普及を担当、もう1つの埋蔵文化財グループは遺跡の発掘調査を担当しています。

[木本]施設作りに、考えたこと（配慮したこと、新しく採用したこと）は何だったのでしょうか？

[宇部]是川遺跡に隣接する施設としての特徴をどのように出すかということがひとつのポイントでした。展示は、縄文の美をどのようにみせるかということ、また国宝である合掌土偶をどう象徴的に見せていくかということもいろいろ検討した点です。集客面ではより多くの方に利用して欲しいと思い、親しみや楽しんで過ごしてもらうように、カフェやミュージアムショップも併設されています。

さらに是川縄文館には約50名のボランティアが登録されています。館内外のガイドやさまざまな体験講座の指導に携わって頂いています。

[木本]今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。貴館での取り組みを教えて下さい。

[宇部]当館は是川遺跡、風張遺跡などの発掘成果をふまえた展示や体験交流等を通して、優れた縄文文化を発信していきます。また八戸市内の遺跡から出土した各時代の埋蔵文化財の積極的な公開・活用に努め、埋蔵文化財保護の重要性を伝えていきたいと思います。

さらに現在、北海道と北東北三県による縄文遺跡群の世界文化遺産登録をめざした取り組みが進んでいます。世界に是川遺跡等の優れた縄文文化を発信していく大きな機会ととらえています。

[木本]本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

常設展示室

常設展示室

収蔵庫の見学窓

体験交流室

国宝展示室

埋蔵文化財センターの教育普及の説明パネル

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

所在地／青森県八戸市大字是川字横山1
開館時間／9:00～17:00
休館日／月曜日（第一月曜日・祝日・振替休日の場合は開館）、祝日・振替休日の翌日（土・日曜日、祝日の場合は開館）、年末年始
観覧料／一般250円（団体130円）、高校・大学生150円（団体80円）、小学・中学生50円（団体30円）※団体料金は20人以上の場合
URL／http://www.korekawa-jomon.jp/
設計監理／株式会社 岡設計

文化施設 14

体験型展示など 楽しみながら学ぶ仕掛けで 地元ゆかりの文学を紹介

Interview

高志の国文学館

話し手　川渕　貴（高志の国文学館 主任）

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

ふるさと文学の回廊

［木本］富山県立の高志の国文学館がオープンしました。高志の国文学館に関する概要と経緯についてお伺いします。

［川渕］高志の国文学館（以下、文学館）は、富山市の中心部に、富山県ゆかりの作家や作品の魅力を紹介し、誰もが気軽に「ふるさと文学」に親しみ、学ぶことができる場として、平成24年7月に開館しました。オープニングから3か月あまりで5万人を超える方々にご来館いただくなど、連日賑わっています。文学館の整備段階から携わった者としては、この1年の間で、文学館周辺を含めて、とても素晴らしい環境になったことを大変嬉しく思っています。

文学館整備の経緯については、平成20年度にふるさと文学の振興策について検討する有識者による委員会が設置されたことが始まりでした。この委員会からは、「富山県の厳しくもあり雄大な風土で育まれたふるさと文学をとおして先人の心を知り、郷土の良さを伝えていくことは大変重要であり、ふるさと文学の振興を進めるべき」という報告を受けました。また、同時期に実施した県民アンケートでは、「ふるさと文学の振興に取り組むべき」との回答が約90%、「文学の振興拠点を整備すべきと」の回答が約75%と、ふるさと文学の振興に肯定的な回答が予想以上に高いことがわかりました。

これらをふまえて、平成21年度からは文学館の整備について具体的な検討が進められ、昭和50年代に建てられ老朽化が進んでいた知事公館を廃止・改修し、隣接する県有地も活用して文学館を整備することになりました。その後、平成22年に設計、平成23年には工事に着工し、このたびの開館に至っています。

［木本］高志の国文学館の特長についてお伺いします。

［川渕］富山県は万葉集を編さんした中心人物といわれている大伴家持が越中国守として5年間赴任した際に223首もの歌を万葉集に残した万葉のゆかりの地です。

現代においても多くの作家や漫画家、映画監督を輩出しており、富山県を舞台にした文学作品も多数あります※。こうした富山県ゆかりのふるさと文学を紹介し、ふるさとを知り、学ぶ機会を創出する情報発信拠点であることが文学館の特長です。

このほか文学館内には文化活動を行うサークルの活動拠点となる研修室や庭を見ながら食事ができるレストランを併設しています。このレストランには全国的にも有名なイタリアンの落合務シェフの直営店が出店しており、こちらも連日多くの利用者で賑わっています。

※堀田善衛や瀬戸内寂聴、角川源義といった作家を輩出しているほか、宮本輝の「螢川」、柏原兵三の「長い道」、新田次郎の「剱岳　点の記」など、富山を舞台にした文学作品も多数あります。さらに富山県は、映画では滝田洋二郎や本木克英、アニメでは細田守を、漫画では藤子不二雄Ⓐ、藤子・F・不二雄らを生んでいます。

ふるさと文学の蔵

ふるさと文学の回廊

エントランス・ライブラリーコーナー

［木本］文学館整備の段階で、配慮されていること、新しく採用したことはどのようなことでしょうか？

［川渕］まず、桜の名所としても有名で風情のある松川べりから文学館へのアプローチをメインとして、今回の整備に併せて文学館南側の隣接地や松川の遊歩道も一体的に整備しました。また、周囲の閑静な住宅街に配慮し建物の高さを抑えるなど、周辺環境との調和にも配慮しています。

また、旧知事公館の広くて緑豊かな庭を活かした配置となっており、館内のライブラリーやレストランから見る庭の眺めはとても開放的です。

次に、館内のレイアウトについてですが、有料ゾーンばかりでは敷居が高くなってしまうので、有料ゾーンの展示室のほかに、読みたい本を自由に手に取って庭に面したソファでゆっくりとくつろいで時間を過ごせるライブラリーや絵本などを読んでいただく親子スペースなど、無料ゾーンを広く設けました。来館者のアンケートで寄せられた意見でもこうした無料ゾーンが設けられていることで気軽に入りやすくありがたいとの評価もいただいています。

展示の面では、この文学館ではいわゆる文学のみならず映画やアニメなどいろいろなジャンルの企画展を開催していく予定であり、それぞれのジャンルや規模に応じて自由にレイアウトできるよう、可動式展示パネルや展示ケースを採用しています。

常設展示室についても可動壁、可動パネルを活用し、展示内容に少しずつ変化を加えていくことにより、「常に何か新鮮な発見ができる施設」として、飽きがこない展示を心がけ工夫していきたいと考えています。

［木本］今回のテーマでは、「感動できる利用者サービスの工夫」を挙げています。貴館での取り組みを教えて下さい。

［川渕］まだ開館して間もないので、「感動できるサービスの工夫」とまで言える取り組みかどうかわかりませんが、富山県ゆかりの文学の魅力を紹介するにあたって、ケースの中に本や原稿を並べるだけではなく、映像や音を組み合わせた体験型展示もあれば、手で動かしてみる、手に取ってみる、などいろいろな仕掛けを取り入れて楽しみながら学んでいただくように工夫しています。

今後も来館者の方がどのような展示やサービスを求めているのかを常に把握して、改善していきたいと思います。

［木本］最後に、今後の活動について展望をお伺いします。

［川渕］様々な企画展やイベントを開催し、年齢を問わず誰もが「文学館に行ってみようか」と思っていただけるような、気軽に楽しめる賑わいのある施設にしていきたいと思います。

［木本］本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

親子スペース

体験型展示（万葉とばし）

体験型展示（不思議な本）

高志の国文学館

所 在 地／富山市舟橋南町2-22
開館時間／展示室9:30～17:00、研修室他9:30～21:00
休 館 日／火曜日（休日を除く）、祝日の翌日、年末年始、臨時休館日
観 覧 料／常設展示：一般200円（団体160円）、大学生160円（団体100円）
※団体料金は20人以上の場合
企画展示：展覧会によって設定
U R L／http://www.koshibun.jp/
設計監理／株式会社 シーラカンス アンド アソシエイツ

文化施設 15 Interview

「土間と蔵」が作り出す空間に、自然光が活かされたミュージアム

株式会社シーラカンス アンド アソシエイツ

話し手 **井原 正揮**（シニア アソシエイト）
磯谷 直昭

聞き手／木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

写真A

[木本]本日は、高志の国文学館を設計されました株式会社シーラカンス アンドアソシエイツへ訪問しました。設計された井原さんと磯谷さんへ高志の国文学館の施設づくりとそこで考えたことについてお話をお伺いします。

[井原]この計画は富山県の旧知事公館を改修し、県ゆかりの作品や作家の展示・収蔵・人々が気軽に集まることのできる場を有したミュージアム棟を増築することで、県の文学館としての再生を期待されていました。【写真A】私たちシーラカンスアンドアソシエイツ（以下、CAn）がプロポーザルで最優秀に選定され、この計画に携われたことは名誉なことです。

文学館というミュージアム施設なので、基本的には様々な展示品や収蔵品が主役になります。それに加えて魅力的な環境も大切です。プロポーザル時に提示されていた要望やスペックを満たすように、意匠と収蔵保存環境および利用者の居住環境の機能の2つのバランスを考慮し設計を進めました。プロポーザルや打ち合わせでは一貫して「土間と蔵」というコンセプトを用い、それに基づいた説明をすることで、イメージの共有を図りました。

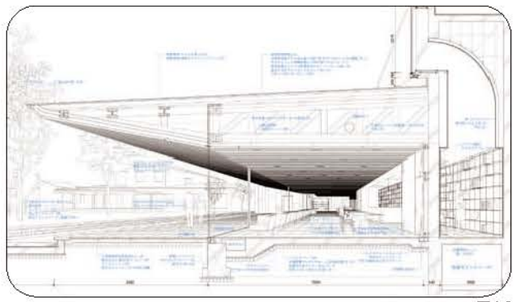
「蔵」は、言葉の通り貴重な展示品や収蔵品を収納する蔵であり、独立した閉鎖的な空間です。「蔵」は全部で7つあります。それぞれの蔵に展示室、収蔵庫、荷解き室や学芸室、研修室などの機能や性格を与えながら分散配置させ、「蔵」そのものに空間バリエーションを与えることができました。展示の蔵を分散させることで、来館者が蔵を行き来するような動線計画とし、空間のメリハリをつくることで、展示物の面白さがより感じ取れるように意識しました。

写真B

「土間」は、蔵と蔵との間を繋ぐ開放的な空間です。回遊性を持たせることで、建物全体に水平方向への奥行と広がりが生まれています。2つの異なる高さの天井があり、自然光を高窓より取込むことで、空気感を感じ取れるようにしています。また、空気、熱や音などに対して、外部からの緩衝領域としての性格を持たせています。【写真B】

[木本]配慮したこと、新しく採用したこと、工夫したことはどんなことでしょうか。

[井原]まずは、ミュージアム施設なので光や温度湿度等の影響に十分に配慮しなければなりません。そこで、蔵の構造に壁式のコンクリートを採用しています。というのも、コンクリートは熱容量が多いために外的な環境変化に左右されにくい特性があるからです。また、庭園が眺望できるライブラリをはじめとした「土間」の構造では、「蔵」の壁式コンクリートが「土間」の屋根を構成する鉄骨トラスを支えており、それにより、柱のない「土間」空間および片持ち13mの庇を実現しています。【写真C】



写真C

次に、新しく採用したこととして、外断熱工法を実施したことです。私たちCAnは学校等の教育施設の設計を多く手掛けており、その設計では光や風等の外的な空気を積極的に取り込み、親自然的な環境を作ってきました。しかし、今回のようなミュージアム施設の場合、収蔵品保護および鑑賞環境の安定のために、外的な環境の遮断が要求されます。この二律背反の条件に対して、これまでの経験を踏まえ、パッケージングされた建物内に外的な環境をどう取り入れていくかがポイントでした。ミュージアム施設では特に自然光が敬遠されるため、発注者と共に検討を重ねました。結果として、高窓のある土間部の展示空間には光に弱い紙や書籍の展示を避けてパネル・モニターといった展示物を配置した上、窓には電動のブラインドを仕込み、建築空間の豊かさと展示空間のスペックのバランスを取っています。また、庭園に面した長さ21mの壁を3m×7mの大きなペアガラス3枚で構成し、外部への視線の連続性や抜けを作っています。その大開口から眺める「万葉の庭」の、時間・天気・季節・歩く人々によって移り変わる風景や、様々な光の状態を感じることができ、外部環境を内部に取り込むことができたのでは無いかと思います。

工夫した点は、立地環境として周囲が住宅街に囲まれていることと南北どちらからもアプローチできる必要があったことから、施設のファサード※1を表、裏のない構成にしたことです。南側アプローチは、桜並木で知られる松川からの観光の立ち寄りを意識しています。庭でひと休み出来ることはもちろん、開館時はライブラリにも立ち寄れますし、無料ゾーンで休憩したり、北に通り抜けたりできるようにしています。反対の北側アプローチは、駅からの来訪や地域住民の立ち寄りを意識しています。そうなると、裏側に配置するべきバックヤードの外側からの見え方について、丁寧に検討する必要があります。内側でもバックヤードの動線が重ならないようにし、セキュリティに配慮して、収蔵庫を2Fへ配置することで、利用者が裏を感じ無いように工夫しています。

[磯谷]プロポーザルプランから、実施設計の骨格は大きく変わっていません。「蔵」と「土間」のコンセプトを基に、スペックの折り合いをつけるよう協議を重ねました。建物で使用している素材や意匠については、知事へのプレゼンテーションで、思い切った判断もいただきました。

[井原]知事の後押しもあり、県産材である杉材ルーバー、ガラス、アルミ鋳物、和紙を各所に取り入れています。特に、アルミ鋳物パネルは外壁や内壁に多く使用されています。アルミ鋳物パネルの表面は、和紙の様な背景の上に、ヤマボウシやイロハモミジ等の超中万葉の中に詠まれた植物の葉を散らし、文学館にふさわしい意匠を実現しています。これらのパネルは職人が1枚ずつ製作しているため、総数800枚にも及ぶパネルは1枚として同じものはありません。製作の各プロセスにおいて試作品やモックアップを何度も作りながら仕様を決めていきました。【写真D】

写真D／一枚ごとに配置される植物（樹脂）

[木本]苦労したことについては、どんなことでしょうか。

[井原]やはり、室内環境を安定させるためのスペックが高かったことです。その中で自然光を取り入れることについて、クライアントとどこに着地点を置くかということに苦労しました。

またミュージアム施設の場合、基本的な順路は一筆書きであることが多いのですが、この計画では蔵を左右に配置したことでシークエンス※2は作りつつも、決まった順路は作らないようにしています。その上で、どうやって管理運営していくかを建築的に対応しています。一般部の壁と統一した管理用の扉や消火栓パネルのディテールの追求、常設展示スペースの出口に設置をした自動ドアへの床埋込エンジンの採用などにより、管理運営のために出て来ざるを得ない日常的なものを視線から極力排除し、抽象的な蔵のイメージを保持することで、非日常的な空間を作っています。

[木本]最後に、高志の国文学館への期待について伺います。

[井原]高志の国文学館は、単純な展示空間だけではない、研修室やレストラン、公園的なランドスケープを併設した複合施設です。文学に興味がある人はもちろん、興味がない人でも、公園やレストランに行った際、ついでに文学に触れることで新たな発見ができる。そういったことを期待しています。文学館のためだけに来る人は元々文学に興味があるわけですから。1＋1＝2ではなく、3や4になるような色々なシナジー効果ができるといいですね。

[磯谷]文学館は美術館などと比較すると、まだまだ認知されていない施設でしょう。市街地にあり、公園や並木道に近い文学館なので、気軽に立ち寄れて、文学に馴染むことのできる存在であり続ける事を期待しています。

[木本]本日は貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

※1 ファサード：建築物の立面（デザイン）
※2 シークエンス：建築では、「移動することで変化する景色」、「徐々に変わっていくデザイン」のこと。空間（線、面）や光など、様々な場面で用いられる。

株式会社シーラカンス アンド アソシエイツ
名古屋オフィス CAn
所 在 地／名古屋市中区栄3-19-19-フォルテ栄ビル302
T E L／052-251-1751
U R L／http://www.c-and-a.co.jp

文化施設 16 Interview

全館一丸でのIPMへの取組み

熊本市現代美術館

話し手
富澤 治子（学芸班 主任学芸員）
蔵座 江美（学芸班 主任学芸員・司書）
杉谷 和泉（総務班）

聞き手
本田 光子（九州国立博物館 学芸部 特任研究員）
木本 拓郎（金剛株式会社企画チーム チームリーダー）

[本田]熊本市現代美術館のエントランスすぐに設けられているホームギャラリー（美術図書室）はとても雰囲気が素敵ですね。美術館としての癒しの空間を感じ取れます。そのギャラリーの片隅にはトラップを見かけました。今回はIPMの取組みについて話を伺いますが、熊本市現代美術館では学芸員だけではなく、総務職員も含めた全館で取り組まれている点がポイントですね。

[木本]それでは、はじめに熊本市現代美術館のIPM実践に至るきっかけについてお話を伺いたいと思います。

[蔵座]熊本市現代美術館では2年前に薬剤燻蒸による大きな事故を起こしてしまい、所有者や寄託館をはじめ、多くの関係者の方々に多大なるご迷惑をお掛けしました。美術館では展覧会作品の貸し借りの度に、必要に応じた薬剤燻蒸の実施を行いますが、その薬剤燻蒸への固定観念と、他方で私たちの作品への保存管理や燻蒸薬剤に関する知識の欠如が起因しました。

[富澤]特に当館では複合ビルの為に燻蒸の経験がありませんでした。燻蒸業者と学芸との協議が十分になされておらず、燻蒸業者への過信がありました。この事故を真摯に反省した上でより良い館作り、環境づくりに館全体の運営システムの変更に着手することになりました。ちょうど九州国立博物館（以下、九博）より文化財保存研修案内があり、研修に参加したことでIPMを知るきっかけになりました。

[本田]この事故はどこでも起こりえたことを十分に認識しなければなりません。これまでの薬剤依存が臭化メチルの全廃以降、それに代わる文化財認定薬剤及び資料保存管理手法の周知が行き渡っていないこと、さらにもう少し踏み込んで言えば、資料の生物被害対策そのものが丸投げで外部委託されていることが反省すべき点でした。

[木本]研修をきっかけにした館内での取組みについてお話を伺います。

[富澤]平成22年に3日間の九博研修を終え、当館が日常管理を何もできていなかったことに気づきました。例えば九博では場所によって温湿度のバラツキがあることを把握されていますが、当館ではそのような環境の違いや変化は把握していませんでした。それは当館が新しい施設設備の為に過信し、環境づくりの必要性を誰も感じていなかったということでした。早速、館内の展示室や収蔵庫の数か所にトラップと温湿度記録計を配置し、自分で「むし・カビ記録ノート」を作成し記録を取り始めました。

[蔵座]富澤さんの九博研修報告が起点に、「むし・カビ記録ノート」の情報共有が進みました。それまで虫やカビ、環境づくりへの意識がなかったので、非常に刺激を受けました。特に「むし・カビ記録ノート」には袋詰めした実際の虫が添付してあり、場所と時間を記録されていますので、リアルな資料になります。（笑）職員全員に回覧し始めてしばらくしてから、事務局長が施設図面に虫の捕獲場所のマッピングをしてくれました。マッピングからどこに虫が多くいるのかが判別できて重宝しましたし、このマッピングから職員全員の意識の変化を感じました。

IPMチームの活動の様子

[杉谷]研修報告を受けて、みんなでやろうとなったのですが、「みんな」とはどこまで共有していけばいいのか？という疑問もありましたし、「学芸のみんな」であって総務担当の私が作業をやるとは当初は思いませんでした。

[本田]では総務の杉谷さんが九博の研修に行くことは大変だったのではないでしょうか。

[杉谷]事故については誰か一人の責任ではなく、館全体としての意識と取組みが重要だと思いました。ですから研修に参加するのに、総務だから行かないとの選択肢はありませんでした。

[富澤]平成23年の九博研修報告会の中では、福岡市美術館の学芸と総務が一緒に、IPM活動を報告されていたのです。「総務でもやれることがある！」という言葉と実践が印象に残り、当館では杉谷さんがそのIPMを担えるパートナーとなったことに頼もしさを感じます。2年間の「むし・カビ記録ノート」「温度・湿度記録」を一人で継続してみて、夏と冬の環境変化や虫の活動する時期を知ることができ、当館の環境に関する個性を把握することができました。当館にとってのベース作りになったと思います。これからは杉谷さん、蔵座さん、私の3名でIPMをチームで行う環境ができました。

[蔵座]展示室や収蔵庫の各所へのトラップの配置、回収、記録ノートを取りながら、温湿度計で室内環境を記録しています。温湿度計は展示室にデジタル計、収蔵庫に毛髪記録計を使用しています。実は毛髪記録計及びデジタル計も開館当初から購入していたのですが休眠の状態でした。（笑）トラップに捕獲した虫も杉谷さんがデジカメで撮影し、同定を行っています。最近害虫事典が欲しいと購入希望を受けました。（笑）

私が担当しますホームギャラリーの本棚やカーテン下の換気、天井の間接照明部のホコリ取りなど、今までやっていなかった当たり前のこともするようになり、掃除しながら新たな気づきを感じています。

[本田]美術館の多くが行っているのは館内空調をベースとした、あるポイントの温度・湿度の設定値管理だけです。でも実態は展示室では来館者や展示ケース等の什器によって温湿度にバラツキが生じ、収蔵庫においては収蔵棚や収蔵品等によってバラツキが発生します。そもそも、部屋の高い所低い所でも異なります。IPMは複数個所で実際の温度・湿度の実測値を把握することで、発生原因を特定し対処できます。IPMでは機械任せにするのではなく、実際の現場を知らなければならないのです。

ホームギャラリー（美術図書室）

[木本]最後に今後の活動の発展についてお話をお伺いします。

[蔵座]当館は開館してから10年余り、IPM活動についてはまだ始めたばかりです。IPM活動については正直、職員みんなにとって「後から出てきた業務」であることは否めません。「IPM業務」と言えるほど日常業務へ落とし込めるよう、気持ちを切り変えることが重要だと認識しました。九博での研修は、意識の変化を与えてくれる貴重な時間でした。資料保存に関する知識向上だけではなく、IPMの理念を共感でき、特に研修に参加した他館の活動や状況を知るのも非常に勉強にもなるし、面白い！1年、2年と経験を積み重ねながら、全職員が「IPM業務」に携われるように発展させたいと思います。190名のボランティアの方をはじめ、ミュージアムショップやレストランの運営会社、さらにビル管理会社も含めた外部との連携を拡げていきたいと思います。

[杉谷]IPM研修や実践活動をしていると、IPMは来館者サービスでもあるのではないかと感じることもあります。個人の意識の変化と共に、館全体の運営・管理にも影響を与えてくれました。一般に学芸と総務は区分されますが、「IPM」を合言葉に共通の目標ができたことで、他の業務についてもお互い共有することができたし、各々の業務への理解も可能になったことが大きなポイントでしょう。各部門が孤立化しないように、さらに職員間連携の発展を期待していきたいと思います。

[富澤]よりよい館づくり、環境づくりへ着手したばかりです。当館のIPMチームは総務の杉谷さん、ライブラリアン（図書館司書）でもある蔵座さん、学芸の私のバックグランドが違う混成チームです。これまで学芸は作品を中心に、総務は人を中心に見ていた各専門の視点や館の運営管理の視点で手を合わせて進めていき、来館者サービスへつながるように発展していきたいと思います。館内では10年計画で、幹部も含めた全プロパー職員が九博研修を受講するプランも構想しています。また、今年の当館のボランティアの研修旅行では九博の環境ボランティアとの交流を計画しています。職員とボランティアの方々とともに、IPMを意識した美術館の環境づくりに取り組むことで、自分たちの自信に繋げていきたいと思います。

[本田]「IPM」をキーワードにした総務と学芸の一体感は見事ですね。見習いたいものです！これまで文化財の扱いは学芸のプロの領域とされていましたが、文化財を総合的にまもることはイコール総務担当にとっても来館者サービスの一環であるという視点は興味深いところです。また館内外に広がるミュージアムにかかわる色々な立場の人たちの交流もこれから楽しみです。

[木本]本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

熊本市現代美術館
所在地／熊本市中央区上通町2-3
開館時間／10:00～20:00
休館日／火曜日（休日を除く）、年末年始
観覧料／常設展示室：無料
企画展示室：展覧会によって設定
URL／http://www.camk.or.jp/